雫と虹

高倉夕紀

第一章　世界樹の森

　太陽の国、雨の国、星空の国、時間の国。それに、村や町も。色々な国があって、色々な世界がある。大抵の人は知らないで一生を終える。もちろん、知っている人だって少なくない。少なくとも僕が住む世界樹の森（別名聖霊の森）の人たちはそのことを知っている。もちろん、僕だって知っているし、僕の兄さんや聖霊様も知っている。聖霊様は本当に色々なことを知っているんだ。この森があるときからここにいるから。でも、そんな聖霊様にも、わからないことがあった。それは、なぜ雨が降らなくなってしまったかだ。

「おーい、フィリカ。あっちの花の土が乾いているぞー」
　僕が苗木に水をあげていると、セージ兄さんの声が聞こえた。ここの森の木や花たちは、雨の水で育っていた。だから、僕たち森の人は水をあげたりしたことはなかった。僕は、セージ兄さんがやればいいと思った。僕だって、他のことをやっているんだから。だれど、兄さんは水あげとかじゃなくて、剪定の方にいるのを思い出した。
本来僕たちはこうやって植物に水をあげることは殆どない。雨が適度に降るから。でも、ここ三カ月ぐらい雨が降らないんだ。雨が降らないと水不足になったりするし、そのうち砂漠みたいになったりする。だから、僕たちはこうして自分たちの手で水をあげているんだ。
「うわー、花たちがシワシワになってる」
　セージ兄さんが言った所は、本当に土が乾いていた。兄さんが嘘をついたとは思ってはいなかったけど。もちろん、兄さんを疑ったわけでもない。ただ、花たちがこんなに水が欲しいと悲鳴を上げているのを見たことがなかったし、想像していなかったんだ。でも、僕だって水が欲しい。僕たち森の人はつねにこの森とともにあるけど、僕たちの水までを植物にあげることはない気がするんだ。木とかの前に、僕たちが脱水症状で死んじゃうよ。それだけは避けなければ。
まぁ、僕はいくら雨が降らなくなって水不足になっても、この森から出る気はない。正確にいうと、森から出たくないんだ。
「セージ兄さん、もう水がないよー」
　僕は自分が持っていたジョウロの水がなくなった。だから、この植物たちにあげるために集められた水が置いてある大きなバケツがある所に行き、バケツの中を見た。水の影も形もない。でも、植物たちは悲鳴をあげている。今すぐにあげなければいけない植物だってある。それに今水をあげないと、また乾いてもっと大変なことになる。
「じゃあ、川に行って水でも汲んできてくれー」
「わかったー」
　僕はセージ兄さんにそう言った。一体セージ兄さんはどこにいるんだろう。姿は見えないけど、声は聞こえるなんて。きっと、鬱そうとした木の中にいるんだ。

　僕は友達を誘って、川に水を汲みに行こうとした。もちろん、あんなに大きなバケツは持って行けない。そんために、大きなバケツの隣には掃除するときに使うバケツが二つある。僕はそれを持っていくことにした。
「おーい、コリウス。今、暇かい？」
　僕は友達のコリウスを見つけた。木の下に立っているだけだから、暇そうに見えたんだ。
「ごめん、フィリカ。今、父さんが木の上で剪定をしているから、その落ちてきた木を細かく切らなきゃいけないんだ。悪いけど、他を当たってくれ」
　コリウスがそう言い終わるやいなや、木の上から枝が降ってきた。僕はどんくさいから、その枝が頭にあたりそうになった。コリウスより僕の方が背が低いのに、一体これはどうゆうこと？　やっぱり、僕がどんくさいのがいけないのかな。僕はコリウスにさよならを言って、川の方に歩き始めた。コリウスと別れた後も、見かけた友達を誘ってみたけど、皆忙しいらしく、結局川へは僕一人で行くことになった。何でかわからないけど、日ざしがとても強かった。

　川の近くの花や木は元気そうだった。幸い、川もまだ枯れていないみたいだし、本当に良かった。でも、川ってどこから流れてくるんだろう。流れているから枯れないのかな。でも、このまま雨が降らなきゃ川の水も干上がってしまう。そしたら本当にもうだめだ。よし。後で、聖霊様の所に行って何かわかったのか聞いてみよう。
「あ！　零しちゃった！」

　僕はしゃがみこみ、バケツ二つに水を汲んだ。そんなに重くないかなって、思ってたんだけど、たくさん汲んだから予想外に重く、よろめいて少し零してしまったんだ。あんまりにも重いから、一つずつ持っていこうかと思ったぐらいだ。中身の水を減らせばいいんだろうけど、どうせまた汲みにこなきゃいけないし。取りあえず二つのバケツを地面に置いた。
「雨、降らないかなー」
　僕は草の上に寝っ転がり、木々の間から見える青い空を見つけた。相変わらずのいい天気。にしても、僕は水を持っていかなきゃいけないのに、どうしてこんなことやっているんだろう。
　そう言えば、兄さんもコリウスも雨が嫌いだって前に言ってた気がする。雨が降ると、気がめいるし、外に出るのも億劫になるって。億劫っていうのはどうゆう意味かはよくわからないんだけど。めんどくさいってことかな。でも、僕は雨、そんなに嫌いじゃないんだよね。確かに、外に出るとかは面倒になるけど、雨が上がったあとはすっごく水滴とかでキラキラしているんだ。僕はそのキラキラが好き。もちろん、雨が降っているときも、いつもと違った感じで好き。虹も、たまに出るけど、凄く綺麗だと思う。
「あ、あれ。何だろう？」
　空を見上げていると、青空に一本の藍色の線みたいな、虹みたいのが見えた。でも、虹とは呼べないかもしれない。虹にしては短いんだ。七色でもないし。でも、本当に虹みたいなんだ。
「ちょっと、見に行ってみよう」
　僕は、その藍色の小さな虹を追いかけた。バケツはそのまま置きっぱなしだけど、気にしなかった。盗む人もいないし。もし、あれが本当の虹なら、あの虹の所だけ雨が降ったのかもしれない。いや、雨が降ってなくたって何かが起きたんだ。それは間違いないと思う。僕はいつの間にか走っていた。虹っていうのはすぐに消えてしまう。消える前に追い付かないと。走っていると、汗が噴き出してくるのがわかった。息も荒くなっていた。でも、早くあの虹の所に行きたかったから、汗も拭わずに走り続けた。虹って見かけるといつも僕は追いかけるんだけど、虹はだんだん遠ざかってしまう。先端にたどり着く前に消えてしまう。でも、今回の虹は遠ざからない。兄さんたちは、虹なんか追いかえても無駄だっていうけど。
「見つけた、やっと……」
　虹の先端は、森の中でも開けた場所にあった。虹の先端には、大きな筆を背中にしょった藍色の髪の男の子が切株に座っていた。始めて見る顔だ。この虹、この子の筆からでてる？
「ん？　君は……」
　男の子、歳が少し上だと思う子は、僕に気づき、こっちに来た。その子が切株から立つと、虹は消えてしまった。
「君は、森の人？」
　背も僕より高かった。多分だけど、この子は森の人ではないんだと思う。始めてみる顔だし、僕たちが着ている服とは違う。僕たちは、原住民っぽい服だけど、この子の服は本で読んだことがある西洋の服に似ていた。一体、どこから来たんだろう？
「うん。君は？」
　僕はその子の問いに答え、同時に聞き返した。
「俺はミンディ。太陽の国の者だ。俺は、虹を作るのを仕事としているんだけど、雨が降らないから帰れなくなっちゃって」
　ミンディはそう言って、空を見上げた。僕もつられて空を見た。僕は色々な国や世界があるのは知っていたけど、会うのは初めてなんだ。だって、僕は森から出たこともないし、出ようと思ったこともない。でも、何でかな。僕は少しドキドキしてる。
「正確には、虹を作るために太陽の国から他の六人と一緒に虹を作っていたんだけど、バランスを崩して俺だけ虹のラインから外れちゃったんだ。気がついたときには、虹も皆もいなくて、帰り道がわからなくなっちゃったんだ。それで、雨が降れば、虹が出るかと思って、ここで待っていたんだけど……」
　ミンディはエヘヘと恥ずかしそうに、少し寂しそうに笑った。もしかして、三ヶ月の間、ここにいたのかな？　でも、もしそうならどうして僕は気づかなかったのかな？　周りを見ようとしていなかったからだと思う。興味なかったし。あんまりこっちの方にも来ないしなぁ。
「これでも、帰る努力はしているんだ。筆に残った色で虹を作ってみたけど、長くなる前に消えちゃうし、水をまいて小

さな虹を作ってみたりもしたんだけど、小さすぎて帰れない。他にも色々な事を試してみたけど、もうお手上げさ」
　ミンディは溜息をついた。深い絶望の溜息だ。僕に何か出来たらいいんだけど。でも、何が出来るかわからないし……。あ！　そうだ、こうゆうときこと聖霊様だ。聖霊様に聞いてみよう。きっと、聖霊様なら何か知っているはずだ。
「じゃあ、僕が何でも知っている人に聞いてきてあげる！　その代わり、川の方に置いてあるバケツを持つのを手伝ってほしいんだ」
　僕の方が背が低いから、ミンディを見上げる形になった。何だか、交換条件とか取引みたいな感じになっちゃったけど、ミンディはいいよって言ってくれるかな？　言ってくれなきゃ困る。だって、あのバケツいっぺんに二つも持てないんだもの。僕はまた、少しドキドキしている。
「いいよ、そのバケツはどこにあるんだ？」
　ミンディはニカっと笑った。
「こ、こっちだよ！」
　僕は少し嬉しくなった。僕はミンディをバケツの置いてある所に案内した。何だか、ミンディとは友達になれそうな気がする。なれたらいいな。

　川について、僕はさっき零しちゃった水を足し、バケツを一つミンディに持ってもらった。ミンディは軽々とバケツを片手で持った。僕なんかバケツ一つでも両手で持たなきゃふらふらして零しちゃいそうなのに。少しミンディのことが羨ましくなった。背も高く、力だってある。何より、一番羨ましいのは髪だ。僕の髪は、黄色っぽいような髪で（僕は茶色のような黄色だと思ってる）ふわふわしている。もしかしたら、天然パーマなのかもしれない。色だって、よくわからないし。その点、ミンディは藍色でストレート。すごく羨ましい。
「そういえば、まだ君の名前を聞いていなかったね。何て名前？」
　ミンディはニッコリと笑った。いいなぁ、僕は笑うのも少し苦手だから、こんな風に笑ったりできないんだ。いつか、笑えるようになれたらいいな。
「僕はフリィカ。あんまり、カッコいい名前じゃないけど」
　フィリカっていうのは明るいって意味があるって、兄さんが教えてくれた。なのに、僕は全然明るくない。僕は少し恥ずかしくなった。
「そうか？　良い名前だよ、音の響きも綺麗だし」
　ミンディはまた笑った。僕は何か嬉しくなった。ミンディって絶対人を褒めるのが上手いと思う。それに、女の子にもモテそうだ。カッコいいもの。バケツの水だって少しも零してないし。
　僕たちは先にバケツを置きに行った。相変わらず、皆忙しそうに植物の世話をしている。
「兄さーん、セージ兄さーん」
　僕とミンディはバケツの中の水をあの大きなバケツの中に移し、兄さんを探した。姿が見えないけど、また木の中にいるのかな？　ミンディはキョロキョロと森を見ている。
「おー、どうした。遅かったなー」
　鬱そうとした木にかかっている梯子からセージ兄さんが降りてきた。やっぱり、兄さんは木の上にいたんだ。結構、近い木だったんだな。兄さんは不思議そうな顔でミンディのことを見ていた。
「川に行ったときに遭ったミンディだよ。彼は太陽の国の人なんだけど、帰れなくなって困っているんだ。だから、聖霊様の所に行って聞いてみようと思っているんだ。いいよね？」
　僕は、兄さんにミンディの事を紹介して、事情を話した。きっと、兄さんならいいって言ってくれるはず。そう言えば、僕がこんな風に誰かの為に自分から動くってあんまりなかったかもしれない。ミンディは兄さんにペコっと挨拶していた。
「ん、わかった。聖霊様に失礼のないようにな」
「うん！　ありがとう！」
　ほら、僕の言った通りだ。兄さんは話のわかる大人なんだ。他のもっと大人大人した人とは違うんだ。流石、僕の兄さん。
「よーし、じゃあ行こう！」

「おう！」
　僕とミンディはひとまず兄さんに別れを告げ、（ミンディはお礼も言ってた）聖霊様の居る所に向かった。

　聖霊様は大抵、世界樹のある所にいる。たまに、どこかに出かけていることもあるんだけど。聖霊様は僕たち、森の人とはちょっと違った姿をしている。僕も聖霊様によく会いに行くわけではないんだけど、聖霊様は白い獣のようなふわふわの尻尾と耳を持っているんだ。で、その耳の下には星のピアスを付けている。そのピアスは本物の星のようにも見えるけど、どうなんだろう。そういえば、僕は一度だけ、長い金髪をなびかせ、銀色の翼でどこかへ飛んで行く聖霊様を見たことがある。聖霊様が飛んだあとは、銀色の光が残るからすぐにわかるんだ。
「なぁ、さっきから言っている聖霊様って何だ？」
　世界樹に向かって歩いていると、ミンディがそう話しかけてきた。世界樹はこの森の中心にあって、どこにいても見える。世界樹は大きいからね。まだ、距離はあると思うけど。
「聖霊様は、この森に住む一番偉い人だよ」
　今日は聖霊様、どこにも行ってないといいんだけどな。
　僕たちは、世界樹の所に行くまで特に何も話さず、ただ歩いていた。でも、黙っていても気まずいとかそんな感じはなく、不思議と嫌な感じでもなかった。僕はあまり、人づきあいが得意な方ではないから、少し驚いた。今回のことだって、ミンディが話しかけてこなきゃ、僕は話しかけなかったと思う。
世界樹まで行くのに思っていたより時間がかからなかった。もうちょっと時間かかるかなって、思ってたんだけどなぁ。いつもは結構時間がかかるし。まぁ、僕は大げさな所があって、五分でつく所とかも十分かかると思ってるんだけどね。本当はそんなに時間がかからないんだなぁ。正確な時間は時計がないからわからないけど。
「遠くから見てて、デカイ木があるなぁと思ってたら、近くに来たらもっとデカイなぁ。てっぺんが見えないや」
　ミンディは、世界樹の前に行き、世界樹を見上げた。そうなんだ。世界樹はとても大きな木で太さも高さも凄い。一体、どれだけの人が集まれば世界樹を囲むことが出来るんだろう。高さだって、雲を突き抜けてるし。きっと、世界樹のてっぺんを見ることが出来るのは、翼をもつ聖霊様だけだろうね。
「聖霊様はどこにいるんだろう？」
　僕は姿の見えない聖霊様を探した。もしかして、どこかに行っているのかな。タイミング悪いなぁ。
「いつもは、ここにいるのか？」
　ミンディもキョロキョロと僕たち以外の人を探した。
「聖霊様に会いたいと思ったら、皆ここに来るよ」
　いつも、ここにいるわけではないんだけど。
「もしかして、上にいるってことはないか？」
　ミンディはまた、世界樹を見上げた。僕も見上げた。ずっと見上げていると首が痛くなりそう。ミンディの問いに僕は何て答えればいんのだろう。その可能性はなくはないと思うけど、僕にはわからないんだ。
「取りあえず、見てくるよ！」
　ミンディは、そう言うとあの背中にしょってた大きな筆（そういえば、先っちょに藍色がついてる）を下し、跨り、まるで魔女が箒で飛ぶように、筆で飛んだ。
「わぁ、凄い」
　僕はまたミンディが羨ましくなった。だって、僕は飛べないから。
「じゃあ、ちょっと上まで行ってくるから、そこで待っててな？」
　ミンディは、少し照れくさそうにそう言うと、あっという間に見えなくなった。いいなぁ、ミンディは空を飛ぶことが出来て。僕たち、森の人は誰も飛行能力を持っていない。ミンディみたいに何かに乗ってというのも出来ない。だから、凄く空を飛べる人が羨ましい。ミンディに頼めば、後ろに乗せてくれるかなぁ。乗せてくれるといいなぁ。
「おーい、フィリカー」
　僕が色々考えていると、いつのまにかミンディの姿が見えた。上から降りてきたんだ。ミンディは、そのまま僕の隣に来た。筆はまた背中にしょった。
「聖霊様、いた？」
　僕がそう聞くと、ミンディは首と横に振った。やっぱり、居なかったんだ。

「上にはいなかったけど、ちょっと先に花畑があるだろう？　来た道とは反対の方に。そこに銀色の翼がある金髪の女の子がいたけど、あれが聖霊様？」
　ミンディは首をかしげた。翼のある女の子。女の子はたくさんいるけど、翼があるのは一人しかいない。もちろん、この森の中だけの話。
「うん、この森に翼がある人は聖霊様だけだもん」
　やっぱり、空から見るのは少し違うみたい。僕もいつかは見てみたいなって、思った。
「よーし、じゃあさっそく行ってみよう！」
　ミンディは気合を入れ、元気よく笑った。僕も、自然とつられて笑っていた。笑うのは苦手なのに、ミンディといると自然に笑えるから不思議。
「そいえば、ミンディ。その筆って……」
　僕はミンディの筆が凄く不思議だと思ってた。箒で飛ぶ人は聞いたことがあるけど、筆で飛ぶって人は聞いたこともなかった。
「この筆？　これは、虹を描くためのものだよ。さっき世界樹の上に行くときは筆に色が残ってなかったから出なかったけど、光と水滴を材料にして虹を描いているんだ。虹を作る七人だけが持っているんだぜ」
　ミンディは少し自慢げだ。それに、褒められて嬉しいって感じの時と同じ顔をしている。きっと、筆はミンディの宝物なんだ。いいなぁ、僕もそんな自慢の品が欲しい。色が残っているとかないっていうのは、絵具と同じなのかな。絵具も色をつけた後は暫く描けるもんね。
　僕たちは花畑に向かった。花畑に行く間、僕たちは色々な話しをした。ミンディは筆のこととか、虹のこととかを教えてくれた。とっても、有意義な時間だったと思う。だって、ミンディの話は僕の知らないことで、とっても面白いんだもの。
「あ！　あれが、聖霊様？」
　花畑に来ると、聖霊様はすぐに見つかった。ミンディでも本当にすぐに見つけられたんだ。花畑はいくつかあるけど、ここの花畑は、全部がカスミ草だ。そう言えば、聖霊様は白い花が好きだったけ。聖霊様は花の世話をしていた。ここの花畑はまだ元気だね。
「うん、そうだよ。聖霊様ー！」
　僕はミンディの確認の問いに答え、聖霊様を大きな声で呼んだ。聖霊様はすぐに気づき、花を踏まないようにしながら、僕たちの方に来てくれた。
「どうしたの？　あれ、その筆を持っている子は太陽の国の子じゃないの？」
　聖霊様は不思議そうにミンディのことを見た。聖霊様の尻尾がゆらゆらと揺れている。聖霊様の声はとても澄んでいて、綺麗で聞いていると心地よい。髪だって、綺麗な金髪でまるで光みたい。肌も白くて、頬はピンク色で、青い目。その目で見られたら大抵の男がデレっとしちゃいそう。人を見た目で判断するわけじゃないけど、顔もスタイルもいい。もちろん、色々なことを知っている。だって、ミンディのこと、すぐにわかったもん。僕はわからなかったのに。とにかく聖霊様は凄い人なんだ。皆の憧れだよね。
「あ、あの！　俺、ミンディと言います。太陽の国への行き方を教えて下さい！」
　ミンディは、少し緊張しているのか、早口でそう言い、事情を説明した。聖霊様はすぐにわかってくれた。そう言えば、聖霊様の外見は十五歳くらいだって聞いたけど、この森がある頃からずーっとここにいるんだよね。つい、同じ十代だと思って騙されちゃうよね。本当は幾つなのかなぁ。年を取ったりはしないのかなぁ。綺麗な人はずっと綺麗だしなぁ。
「私もあまり詳しくはないけど、夕暮れの街に行くといいよ。この森に迷い込んだ人は必ず夕暮れの街に行くもの。
　それに、夕暮れの街で何か、雨が降らない原因がわかる気がする」
　聖霊様は、少し考えこみ悩んでいた。一体、聖霊様はこうゆう話しをどこから仕入れてくるんだろう。僕は何となくそう思った。
「本当は虹が一番早いんだけど、太陽の国までとなると雨じゃなきゃそんな虹は出来ないし……」
　聖霊様はさらにそう続け、なぜ雨が降らないのかと悩んでいた。
「あ、あの！　その、夕暮れの街にはどうやって行けばいいんですか？」
　ミンディは必死だった。うん、やっぱり自分の国に今すぐにでも帰りたいよね。両親だって友達だっているもの。もう

少し、ミンディと一緒にいて、色々な話を聞きたかったけど、残念だったな。
「夕暮れの街に行くには、太陽の沈む方向に向かって真っすぐに歩いていくの。何があっても、絶対真っ直ぐに。夕暮れの街には、朝日とともに出発して日没と同時に着かなければならない。つまり、太陽と一緒に進むってことだね。夕暮れの街に着くと、視界が変わるからすぐわかるよ」
　聖霊様は昔を懐かしむように言った。きっと、聖霊様は夕暮れの街に行ったことがあるのだろう。僕も、その夕暮れの街が一体どんな所か気になったけど、ただ気になっただけでやっぱり森から出たいとは思わなかった。
「えーっと、君はフィリカだっけ？」
　僕はぼーっとしてたから、はっとした。と、同時にびっくりした。だって、あの聖霊様が、僕たちには手の届かない聖霊様が僕に声をかけてきてくれるなんて！　しかも、僕の名前を覚えていてくれてるなんて！　聖霊様は、そんな僕の心がわかるのか、青い目を細めてクスっと笑った。
「一人じゃ、寂しいだろうからさ、君も一緒に行ってあげて？　もしかしたら、雨が降らない原因がわかるかもしれないから」
　聖霊様は、今度はニッコリ笑った。聖霊様はとても綺麗だ。僕だって男だし、少しドキドキしちゃう。森から出るのは、嫌だけど聖霊様の頼みならしょうがないよね。男って単純だな。つくづくそう思う。
「は、はい！　わかりました！」
　僕は元気よく、そう言ったけど、絶対顔が赤かったと思う。聖霊様は僕の言葉を聞いて、またニッコリと笑った。
チラっとミンディの様子を見てみたんだけど、ミンディも顔が赤かった。
「今日の朝日はもう上がっちゃってるから、明日出発するといいよ」
「ありがとうございます！」
　ミンディはすっかり、あがっちゃってた。それだけ聖霊様は綺麗な人なんだ。こんな人が彼女だったら、凄く幸せだろうなぁ。まぁ、僕はまだあまり恋愛には興味はないんだけど。
　僕たちは、聖霊様に手を振られながら花畑を後にした。次の行先は、僕の村。大きなバケツがあった近くだ。
「聖霊様、綺麗だったなぁー。外見は俺たちと同じくらいなのに」
　ミンディは僕と同じことを考えていた。すっかり、顔がニヤけちゃってる。
「うん。たまに会えるだけでも、ラッキーだなって思ったよ」
　本当に。会えなくても、聖霊様と同じ世界にいるだけでもラッキーだよね。ミンディは羨ましそうに「いいなぁ」と呟いた。僕は少し嬉しくなった。だって、ミンディに自慢できることがあったんだもの。
　バケツの所に戻ると、もうバケツはなくなっていて、どうやら今日の作業は終えて、皆家に帰ったみたいだ。もちろん、僕も家に帰った。ミンディを連れてね。家には兄さんがいて、さっきまで青空だった空はほんのりと赤くなってきていた。まるで、さっきの僕たちの赤さと同じなだって思った。
「聖霊様には会えたのか？」
　セージ兄さんは夕食の支度をしていた。この匂いは野菜炒めだ。そもそも僕たち、森の人は肉を食べないから野菜か山菜とか木の実とかしか食べないんだけどね。まるで、リスみたいだなぁって僕は思ったことがあるよ。
「うん。あ、聖霊様が僕も一緒に行けって言ってたんだけど……」
　本当はあまり行きたくないけど、聖霊様が言ったのなら仕方がない。僕はチラリとミンディの方を見、兄さんの方を見た。
「いつ出発するんだ？」
　兄さんは僕の方を見ずに言った。表情がわからないから、兄さんが何を考えているかわからなかった。
「まず、夕暮れの街ってとこに行かなきゃ行けないんだ。夕暮れの街に行くには、朝日と同時に出発しなきゃいけない。だから、明日の朝日と同時に出発しようと思っているよ」
　兄さんは相変わらず僕の方を見ないで、野菜を炒めている。
　僕は兄さんと二人で暮している。父さんと母さんは随分前に消えちゃったんだ。消えるっていうのは、死んだってことと同じ。僕たちは消えるって言うんだけど、消えた後、どこに行くかは誰にもわからないんだ。聖霊様でさえも。
「明日か。随分と急だな。でも、聖霊様の言ったことだ。行っておいで」
　兄さんは、火を消し、やっとこっちを見てくれた。少し、寂しそうに笑っている。でも、同時に兄さんは森から出たがらない僕のことを心配していたから、ちょっと嬉しそうでもある。いわゆる、僕は引きこもりってやつなんだ。

　僕とミンディは、明日が早いから兄さんに早めに夕食にしてもらって、早めに寝てしまった。朝日とともに出発ってことは、朝日より先に起きなきゃいけないってことだ。そんなに早く起きれるか不安だけど、兄さんの作る美味しい夕食を食べているそんなことはどうでもよくなった。暫く、兄さんのご飯が食べられなくなると思うと、行きたくなくなったし、寂しくなった。それ以外は頭の中からどこかに行っちゃった。僕には結構重要なことだ。兄さんのご飯が食べられないことは。ミンディは、あんまりそうゆう素振りを見せないけど、どうなんだろう？　一人で知らない所。寂しくないのかな？　僕の部屋で一緒に寝ることになったかた聞こうと思ったんだけど、ミンディはすぐに寝てしまった。僕は色々と考えていたから起きてたつもりだったんだけど、僕もいつの間にか寝ていたらしく、気づいたら兄さんに起こされていた。
「おい、起きろ。朝日が登っちまうぞ。ミンディはもう起きてるぞ」
「え！？」
　僕は、兄さんのその声でパッチリと目が覚めた。外はまだ暗かった。何か一瞬しか寝てない気がする。
「ほら、フィリカ。準備しといてやったぞ」
　兄さんは、パンパンに膨らんだ僕の愛用のリュックサックを背負わせてくれた。そういえば、昨日は何の準備もしないで寝ちゃったんだ。兄さんが準備しておいてくれたんだ。兄さんはちゃんと寝たのかな？
「ん、ありがとう。兄さん」
　僕は眠い目を擦った。ミンディの姿がどこにも見えなかった。
「ミンディは、もう外にいるよ」
　兄さんは僕の考えがわかるのか、そう答えてくれた。そうか、もう外にいるんだ。きっと、朝日を待っているんだ。ミンディは眠くないのだろうか？
「気を付けて行ってこいよ」
　外まで見送りに来てくれた兄さんがそう言った。
「うん」
　僕は何かこみ上げてくるものがあったけど、我慢した。だって、余計兄さんを心配させちゃうだろ？
「お、来たか」
　ミンディは朝から元気そうに笑っていた。僕はまだ眠いのに、ミンディは凄いなぁ。僕もミンディも空を見上げた。東の空が明るくなってきている。
「もうすぐ、朝日だね」
　僕はあくびをしながら、ミンディに言った。ミンディは頷き、東の空を見ていた。そして、ついに朝日が顔を出した！
「兄さん、行ってくるねー！」
　僕たちは朝日とともに出発するのに成功し、僕は兄さんに手を振り、別れを告げた。兄さんも手を振ってくれた。見えなくなるまで手を振り続けた。
　僕は、絶対森を出ないと思ってた。出ようとも思ってなかった。まさか、こんな形で森を出ることになるとは驚きだけど、どこか、僕の奥の方でワクワクしている僕がいた。きっと、もしかしたら、僕は森を出て、何か変わるのかもしれない。そう思うと、森から出るのがあんなに嫌だったのに、ちょっと楽しみになってきた。

第二章　夕暮れの街

　僕たちは聖霊様に言われた通り、朝日とともに出発した。言われたとおり、太陽と一緒に進んだ。と、言っても太陽は早く動いているわけではないから、少しじれったくなった。でも、僕たちはちゃんと聖霊様の言うとおりにした。途中、何回か休み、リュックサックに入っていた兄さんが作ってくれたサンドイッチをお昼にミンディと食べたりした。何だか、とっても一日を無駄にした気分。最後の方はかなりだらけていたけど、僕たちは耐え、太陽と一緒に進んだ。
「あ！　見て！！　ミンディ、太陽が！！」
　やっと、太陽が真っ赤な夕日に変わった。そう言えば、お昼とかの太陽は黄色いような感じだけど、沈むころには赤くなるけど、それは何でなんだろう？
「よし！　あの夕日を目指していくぞ！」
　僕とミンディのテンションはいっきに上がった。さっきまで、あんなにだらけていて、テンションも低かったのに。僕たちは、夕日とともに進んだ。あんまりにもテンションが上がり、ついにはどこかの青春物のように夕日を目指して走り出していた。
　日没。急に視界が変わった。いつも見慣れている森が、段々とぼやけて来て、夕日色に染まってきた。もしかして、これが聖霊様の言っていた視界が変わるってこと？
「フィリカ！　俺、夕日に向かって走っていたはずなのに、夕日の中を走っているよ！」
　ミンディも僕と同じ世界を見ているみたい。ミンディの声は感激している声だ。そんな僕も感激しているんだけどね。それに、ミンディの夕日の中を走っているっていう表現は、良いと思う！　だって、それ以外には表現がしようがないもの。
　その夕日の中を走っていると、視界はまた変わり、ぼんやりと街が見えてきて、夕焼けの空がどこまでも続く街に出た。
「ここは……」
　ミンディは走るのを止め、あたりをキョロキョロと見渡した。森の中にいて、夕日の中にいた。今はどこかの街にいる。
「もしかして、ここが聖霊様の言っていた夕暮れの街？」
　僕もミンディの隣で、あたりを見渡した。見た感じ、そんなに大きな街ではなく、街の真ん中には大きな噴水がある。噴水の水には、空の夕焼けの色が映っていて、凄く綺麗だ。
「綺麗な街だね」
　ミンディがそう言った。うん、僕もそう思ってた所だよ。
「すみません、ここは夕暮れの街ですか？」
　ミンディが通りすがりのおじさんにそう聞いた。おじさんは立派な口髭をはやしている。
「そうだよ、夕暮れの街は初めてかい？」
　口髭のおじさんはそういって、笑った。何だか、優しそうなおじさんだ。やっぱりここが聖霊様の言っていた夕暮れの街なんだ！　僕は何だか嬉しくなった。
「ありがとうございます！」
　僕はすっかり、テンションがあがり、元気よくおじさんにお礼を言った。

「おい、フィリカ。色々見て回ろうぜ！」
　ミンディもすっかりテンションがあがっている。何か、ちょっと来てよかったかも。
　夕暮れの街は凄く綺麗だ。色々な物が夕暮れ色に染まっている。街の人たちも凄くいい笑顔！
　あそこで、立ち話しているおばさんたちもいい笑顔！　素敵な街だ。
「僕、この街気にいっちゃった」
　僕とミンディは街の中を散策した。広いとは言えない街だけど、森から出ようと思ってなかった僕には凄く新鮮。兄さんにも見せてあげたいなぁ。そう、考えていると、頭にポツンと水滴のようなものを感じだ。
「あれ？　今、水滴のようなものが……」
「水滴？　雨か？」
　僕とミンディは不思議そうに空を見上げた。見上げた先には雨雲何かなく、綺麗な夕暮れの空だ。気のせいだったのかもしれない。でも、気のせいではなかった。綺麗な夕暮れの空から、スコールのような雨が降ってきたんだ！　天気雨だ！
「雨だ！　やっぱり、雨だったんだ！」
　ミンディは嬉しそうな声をあげた。
「ミンディ！　屋根のある所にいかないと、濡れちゃうよ！」
　僕は空を仰いで、まるで恵の雨だと言わんばかりにはしゃいでいるミンディをひっぱり、屋根のある所に行った。どこかの店先の軒下。だけど、入ったそこに言った瞬間雨はすぐにやんだ。
「あれ？　もう、やんだの？」
　ミンディは、すぐに屋根の下から出て、また空を見た。街を見渡すと、慌てて洗濯物を取り込もうとしている人とか、持っている鞄を傘代わりにしている人が目に入った。
「ん？　あれ？　あんな子いたっけ？」
　ミンディは噴水の方を見ていた。僕もミンディの見ている方を見た。そこには、さっきまでいなかったのに、青い髪をポニーテールにして、水玉の傘を持った女の子が立っていた。女の子は、その傘を折り畳み、鞄の中にしまっていた。
「ううん、雨が降る前はいなかった」
　ミンディはあの子のことを言っているんだろう。にしても、本当に、あの子はいつからあそこにいたんだ？　僕たちは、さっき噴水の近くまで行ったけど、そのときにはあんな子はいなかった。それとも、僕たちが気づかなかっただけなのだろうか？　女の子は僕たちの視線に気づき、こっちを見た。凄く目の綺麗な女の子だと思った。まるで、宝石のサファイヤか何かで作られたみたいだ。聖霊様の方が綺麗だけどね。
「お、おい。あの子、こっちに来るぞ」
　僕は女の子の目に魅いってたみたい。ミンディの焦る声で女の子がこっちに来るのに気づいた。目だけじゃない。女の子は髪もキラキラしていて綺麗だ。ミンディはそのことに気づいてないのかな？
「君たちは、この街の人？」
　女の子はついに、僕たちの所にやってきた。ミンディと同い年くらいかな？　それとも、僕と

同い年かな？　ちょっと、わからなかった。でも、僕より身長は高い。
「いや、俺たちは違う。君はいつからそこにいたの？」
　ミンディは女の子にそう言った。女の子は僕とミンディを交互に見ている。
「私はさっき来たの。雨の国のレイニィだよ。君たちは？」
「え？　雨の国？」
　ミンディはレイニィと名乗った女の子の言葉に反応を示した。
「俺は太陽の国のミンディ。雨が降らないせいで、虹が作れず太陽の国に帰れないんだ。雨を降らせているのは雨の国だろ？　何で、雨が降らなくなったんだ？」
　ミンディは真剣だ。あぁ、そうか。ミンディを太陽の国に送るのが僕のやることだったっけ。ミンディが一人で行くのは寂しいから一緒に行ってあげてって聖霊様に言われたんだった。レイニィは暫く黙っていた。僕はミンディが何か言うかと思った。でも、何も言わずにレイニィが話してくれるのを待った。だから、僕も何も言わずに待つことにした。レイニィが話してくれるのを。
「……心の雫が砕けちゃったんだ」
　レイニィは、話してくれた。
「雨の国には、雨を司る姫様がいるの。その、姫様の心の雫が粉々に砕けて、飛び散ってしまったんだ。姫様は、心の雫……つまり、心をなくして、眠っている。それで、私たちの国に雨が降らなくなってしまった。雨が降らなくなってから、誰が心の雫を探しに行くかの試験をして私が選ばれたの。さっきの雨は、国を出るときに貰った雨の結晶のカケラで降らせたものだけど、そのカケラは一度しか使えないから消えちゃったし……」
　レイニィは少し悲しそうだった。僕はもちろん、雨の国何かに行ったことないから、どうやって雨を降らせているのかは知らない。けど、きっとその雨の姫様が降らしていることはわかった。
「何で心をなくしたぐらいで、雨が降らなくなるんだ？　大体、雨の国はどうやって雨を降らしているんだ？」
　ミンディはレイニィに問い、続けた。
「俺たちは、水滴と光で虹を描くけど、雨はどうやって作っているんだ？」
「雨は雨の結晶を持っている人じゃないと降らせられないの。さっきのは、カケラで、姫じゃない私が使ったから使い捨てみたいなものだけど、姫様が持つと何回も使えるの。それに、雨は姫様の心に影響されるの。たとえば、どしゃぶりの時は姫様が怒って、ストレスと発散させているとかね。太陽の国にも太陽を司る人がいるでしょ？」
「うん。いるよ。王様のことでしょ？　いつも、光ってるよ。その光が太陽になるんだ」
「それと同じようなもの。うちは、姫様が降らせた雨を浴びて大きくなる雨の花っていうのがあるんだけど。雨の花は大きくなると、その葉を私たちの家にして、花は種を飛ばすの。それが雲にくっつくと、雨雲になって、他の国に雨を降らせるんだよ。でも、姫様が眠りについた今じゃ、雨の花も種を出さなくなったし……」
　ミンディとレイニィはその後も暫く話していた。何か、ちょっと仲間外れにされてみたいで

複雑。僕だって会話に入りたい。だから、二人の邪魔をすることにした。
「つまり、レイニィは雨の姫の心である心の雫を探しているってこと？」
　ってね。ほら、僕が会話に入ったことで、ミンディとレイニィは僕の方を見た。仲間外れではなくなったけど、今度は注目されているみたいで、ちょっと嫌だなぁ。
「うん。でも、どこに砕けちったのかわからないから、こうして夕暮れの街に来たんだ」
　レイニィは情報を集めないとなと、呟いた。そういえば、聖霊様が夕暮れの街に行けば、雨が降らない原因がわかるかもって言ってたけど、このことだったのかな？
「あ！　でも、心の雫が近くになると、この雨の雫の色が変わるんだ。でも、今までにそんなことなかったから、どんな色になるかはわからないんだけど」
　レイニィは首から下げている薄水色の石のような水晶のようなものを見せてくれた。雫というだけあって、雫の形をしている。
「あ！　おじさん！　ちょっと聞きたいことがあるんだけど」
　雨がやんだから、噴水広場（僕が勝手にそう言っているだけで、本当の名前は知らない）にたくさんの人が集まってきた。そこには、さっきの口髭おじさんもいた。そのおじさんにミンディが声をかけた。
「ん？　さっきの子たちじゃないか。さっき、雨が急に降ってきたから驚いたよ。それより、どうしたんだい？」
　口髭のおじさんは、僕たちのことを覚えていてくれた。まぁ、そんなに時間もたってないし、覚えているのは当たり前か。
「この女の子が心の雫っていうのを探しているんだけど、何か、そんな感じの見たことない？」
「心の雫？」
　口髭おじさんは心の雫という単語に反応した。もしかして、知っているのかな？　おじさんは続けた。
「さぁ……。よくわからないけど。でも、確か、最後に雨が降った日に、何か光るものをその雨の中で見た気がする。確か、あれは……星空の国の方に落ちて行ったと思うよ。雨の日に流れ星かとおもって、びっくりしたんだけど……。おっと、いかん。早く家に帰らなければ」
　口髭のおじさんは、そこまで言うといそいそとどこかへ行ってしまった。何かあったのかな？
　でも、そんなおじさんの行動を気にしたのは僕だけだった。
「星空の国っていうと、夜の方向にある国だよね？　行ってみる価値はあるかもしれないね」
　レイニィは考えこみながらそう言った。ミンディもうんうんと頷いた。もしかして、もしかしなくてもその星空の国っていう所に行くのかなぁ。行く気満々だし。
「夜の方向ってことは、夜が来る方向か。その心の雫が手に入らないとずっと雨は降らないし、俺もいっちょ手伝ってやるよ。雨が降らないと仕事がなくなっちゃうし。フィリかも行くだろ？」
　ミンディは行く気満々で僕の方を向いた。僕は、あんまり気が進まないけど。だって、ミンディが一人で寂しいだろうからって来たのにもう一人じゃないし、確かに夕暮れの街は綺麗で外も楽しいけど、できれば早く森に帰りたかった。でも、帰り道もわからないし。

「うん、一緒に行くよ」
　そう言うしかなかった。ミンディの笑顔が一緒に来るのを前提に考えている笑顔だった。夕暮れの街を後にし、夜の方向へ向かった。赤くて綺麗な街。来てよかったかな。

第三章　星空の国　前編

　夜の方向っていうのは、月が昇る方向のこと。つまり、太陽が昇る方と同じで、東ってこと。僕たちは東に向かった。星空の国に行くときも夕暮れの街に来たときのように視界が変わったりするのかな。
「そう。フィリカは世界樹の森の人なんだ。森の人は初めて見たなー」
　僕はレイニィに森のこととか、聖霊様のこと、セージ兄さんのことを話した。レイニィが言うには僕たちは珍しいらしい。何より、森自体が特殊なんだって。よくわからないけど。
「世界樹の森からは、行き方さえ知っていればどこの世界にも行けるんだよ。雨の国からは夕暮れの街には歩いて行けないから雨にのって来たんだ。そういえば二人は知ってる？　太陽の国、雨の国を含めたこの近辺は自然界っていうらしいよ。たくさんある世界の一つらしいね。他にどんな世界があるのかは知らないけど。その中でも世界樹の森はたくさんある世界の中心にあるんだって。だから、その聖霊様も特別な存在なんだよ」
　レイニィは意外とおしゃべりで、物知り。これには、僕もミンディも驚いた。もっと、大人しい子かと思ってたんだ。レイニィは色々な話をしていた。とにかく、僕とミンディが口を挟む余裕もないくらいにしゃべり続けた。
「ん？　何だか少し暗くなってないか？」
　ミンディがやっとのことで口を挟んだ。レイニィは嫌な顔はしなかったけど、またしゃべり始めた。
「そう言えば聞いたことある。星空の国に近づくと空が暗くなるって」
　確かに、レイニィの言うとおり夜の方向に向かうにつれて空は暗くなっていった。それと同時に空に星が出ている気がする。そういえば、結構歩いたのにレイニィのおしゃべりのお陰でそんなに長い間歩いてると感じなかったな。
「にしても、夕暮れの街は綺麗だったね。私んとこなんて、いつも雨だから少し新鮮だったかな。夕暮れを見たのも初めてだったし」
　星空の国に着くまでレイニィはずっとしゃべっているのかと思った。まさにその通りだった。夕暮れの街を出てから結構たっていると思う。日が落ちるのは早いっていうけど、僕たちはいつのまにか真っ暗な所を歩いていた。真っ暗で回りが見えない。しかも、何か少し空間が歪んでいるような気がするけど、気のせいかな？
「何か嫌な感じの所にでちゃったなぁ」
　ミンディの声がした。どこにいるのかはわからないけど、近くにいるみたい。真っ暗でミンディとレイニィがどこにいるのかもわからない。
「二人も近くにいるの？」
　僕は手探りで二人を探した。
「あいたっ！　ちょっと、フィリカ！足踏まないで！」
「あっ！　ごめん、ごめんね！」
　僕はどうやらレイニィの足を踏んだらしい。暗くて何も見えないけど、足をどかした。

「一体何だってんだ？」
　ミンディがそう呟くのが聞こえた。
「取りあえず、はぐれないように手を繋ごう」
　僕たちはミンディの言うとおり、お互いの手を探した。暗いのに慣れてきたのか、なんとか二人の姿がうっすらだけど見えるようになり、僕たちは手を繋いだ。女の子と手を繋ぐのは初めてだったから、ちょっと恥ずかしくなった。
「そういえば、私聞いたことがある。周りが真っ暗になったら気をつけなさい。夜の国が近くにあるからだって」
「「夜の国？？」」
　僕とミンディの声がハモった。
「うん。夜の国。迷いこんだら最悪なことになるって。そこに住んでいる住人も変な人たちばっかりだから、絶対行かない方がいいって」
　聞かなきゃ良かった。僕は、そう思った。だって、急に怖くなって来たんだもの。
「と、とにかく進もう」
　ミンディの声だ。表情は暗くてよく見えなかったけど、ミンディも怖がっているみたい。
「そうだね。早く行こう」
　二人が頷いたような感じがした。とにかく、僕たちは進むことにした。早く、この怖い所から出たかった。

　歩いていると、だんだんと月明かりが見えてきた。どうやらあの暗い所を抜け出せたみたい。僕たちは繋いでいた手を離した。
「あ！　見て！」
　ミンディが星空の下、何かを指差した。ミンディの指差した先にはアーチ形の門みたいのがあって、看板に光る文字で星空の国と書いてある。
「ここが、星空の国」
　どのくらい歩いていたのかはわからない。だって、誰も時計を持っていないんだもの。でも、ずっと歩いていたから足が痛い。それに、ちょっと眠くなってきた。夕暮れの街には、夕方についたから、きっともう夜なんだと思う。
「取りあえず、行ってみよう」
　ミンディが先頭をきった。僕たちもそれに続いた。
　星空の国は夕暮れの街とは、随分と違った雰囲気を出していた。夕暮れの街が綺麗で不思議なら、星空の国は神秘的。空を見上げるとたくさんの星が瞬いている。
「そういえば、世界樹の森に住む聖霊様が通ると銀色の光が残って、流れ星みたいに見えるって本当？」
　星空を見上げていると、レイニィが問うた。
「うん。本当だよ。僕は一度だけ見たことがある」
　凄く綺麗だった。兄さんと一緒に見たんだけど、兄さんも言葉を失っていたもの。

「見て！　あそこに城がある。行ってみよう！」
　ミンディは、今度はキラキラと光る大きな城を指差した。月明かりが城を照らしていて、凄く幻想的に見える。
　僕たちは城までに行く道で城下町っていうのかな？　そんな感じの所を通った。でも、誰も外にはいなかった。家から光が漏れているから中にはいるみたいなんだけど。
「あの口髭おじさんの話だと、雨に混じってキラキラしたものが降るのを見たって言ってたよね。でも、それが心の雫とは限らないし、心の雫だとしても心の雫がどんな形でどんな色をしているのかもわからないし……」
　レイニィは、首からさげている雨の雫を見た。雨の雫は最初に見せてもらった時と同じ薄水色だ。
「雨の雫は心の雫が近くにあると、一体どんな色になるんだろう？」
　レイニィは、雨の雫をそう言いながら首から外した。そのとき、急にレイニィの手の中から雨の雫が消えた。
「え？　あれ？」
　一瞬で、しかも急な出来事だったから、僕たちにもレイニィにも何が起きたのかよくわからなかった。キョロキョロと周りを見てみると、走って行く背の低い男の子の姿が見えた。
「あ！　あいつ、雨の雫を持ってる！！」
　ミンディはよく見えるように目を細めた。僕も同じようにして男の子を見たら、男の子の右手にはしっかりと雨の雫が握られている。僕たちはあの男の子に雨の雫が盗まれたのだと理解した。
「追いかけよう！」
　レイニィはそう言うと、もの凄いスピードで走りだした。ミンディも、箒に乗って男の子を追いかけた。僕も走ったんだけど、出遅れたし、しかも足が遅いから中々追いつけない。男の子は凄いスピードで走っているレイニィから逃げられるほど足が速かった。
「待てー！！」
　レイニィは、さらにスピードを上げた。ミンディもスピードを上げ、二人はみるみるうちに男の子に追いつき、二人で挟み打ちをかけた。男の子は挟まれてない横から逃げようとしたけど、レイニィがそこを取り押さえた。このとき、僕はやっと二人に追い付いた。僕は息がきれ、脇腹とか痛くて苦しかったけど、同じ走っているでもレイニィも男の子も平気そうにしていて、ちょっと悔しくなった。ここの最近、運動不足だったからなぁ。これからは、ちゃんと運動しよう。
「ちょっと、あんた！　私の雨の雫返えしなさい！！　それは、値打ちがあるものじゃないよ！」
　レイニィは、そう言い男の子の手から雨の雫をひったくった。にしても、レイニィ凄い気迫だな。男の子はくるくるっとした茶色い髪で、僕たちより、少しだけ年下に見えた。
「ちょっと！　聞いてるの！？」
　男の子はずっと下を向いている。前髪が長く、下を向いているから男の子がどんな表情をしているのかわからない。レイニィは凄く怒っているけど。

「お前、人の物は盗んじゃダメなんだぞ。例え、何があっても」
　ミンディはレイニィとは対照的で優しく言った。その間も男の子はずっと下を向いている。
「この子、城に連れて行こう。何も言わないし、今から行くんだからちょうどいいよ」
　レイニィは凄く怒っている。ここで、それはやめた方がとか反対したら、もしかしたら僕たちは八つ当たりを受けるかもしれない。でも、僕が何かを言う前に男の子が、はっとして顔をあげた。
「それはダメ！　レックスには、王子には言わないで！！」
　男の子は宝石のような緑色の目をしていた。
「お願いします！　謝りますから……」
　男の子はまた下を向いた。僕たち三人は顔を見合わせた。
「あんた、名前は？　何で盗んだの？」
　レイニィは相変わらず怒ってはいるけど、さっきよりは怒っていないみたいだ。でも、この男の子の返答次第ではもっと怒りだすこともあり得るから気をつけないと。
「コカブと言います。お願いだから、言わないで！」
「あんたの返答次第だね」
　コカブと名乗った男の子はレイニィの気迫とか迫力とかにおされて、今にも泣きそうだ。僕はちょっとコカブが気のどくになった。
「僕にも、よくわからないんです。青い石を持っている人がいたら、その石を持ってこいって言われて……」
「誰に？」
「それが、よくわからなくて。男の人でした」
　僕たち三人はコカブの話を聞き、また顔を見合わせた。
「もしかして、心の雫を狙っている人がいる？」
　ミンディは眉をよせた。
「でも、誰に？　何で？」
　レイニィは首をかしげた。僕たちはまた顔を見合わせた。
「でも、青い石だけで決めつけちゃダメだよ。青い石って意外とあるし」
　僕はチラリとコカブを見ながら言った。コカブはすっかり怯えてしまっている。青い石っていうのは、いくつかあると思う。と、いうか水系の石は全部青い石だ。それに、青い宝石だっていくつかある。それぞれ形は違うけど、石みたいにみえるし。だから、心の雫を盗もうとしている人がいるかどうか決めるのはまだ早い気がする。情報も少ないし。
「確かにそうだね。この雨の雫だって知らない人からみたら青い系の石だもんね」
　レイニィは雨の雫を首にかけた。コカブはその動きをじっと見ていたけど、また下を向いた。
「取りあえず、城に行こう。何か知っているかもしれない」
　ミンディがそう言うと、コカブははっと顔をあげた。きっと、コカブのことも言われるんだと思ったんだろう。ミンディはその視線に気づいた。
「別にお前のことを言うためじゃないよ。聞きたいこともあるし」

「私は言いたいけどね。そもそも、青い石がどうのって言われたからって盗むのは間違っている。親にそう教えられなかったの？」
　ミンディが慰めるように言ったあと、すぐにレイニィが冷たく言い放った。レイニィも結構キツイなぁ。コカブは大きな目に涙が溢れていた。でも、レイニィの言ってることは正しいから、僕もミンディも何も言えなかった。
「とにかく、城に行くよ！」
　レイニィは、そう言いキラキラと輝く城を目指して歩き始めた。僕たちもそれに従ったけど、コカブはついてこなかった。

　城の近くまで来ると、なぜ城がキラキラ光っているのかがわかった。城にたくさんの星屑が飾られているんだ。それに、城の周りをたくさんの箒星が飛んでいる。遠くでみるよりも綺麗で、僕は一度だけどこかで見たことのあるクリスマスのイルミネーションを思い出した。
「うちの城、こんなに綺麗じゃないよ」
　ミンディは城を見て、そう呟いた。空に輝く無数の星と丸くて大きな月の光が、城をいっそう綺麗に幻想的に、神秘的に見せていた。
　僕たちは城門まできたけど、やっぱり誰もいなかった。何より不思議なことは、城門が開いているんだ。普通は閉まっているって兄さんから聞いたことがあるから少し驚いた。
「何で誰もいないんだろう？」
　僕たちは城門をくぐり、城の敷地内に入った。
「普通は誰かいるんでしょ？」
　僕は二人に問うた。僕の所は、城とかないからよくわからないんだ。
「普通はね。私の所にも確かいたはず。ミンディの所は？」
「うん。俺んとこもいるよ。あ、城の門も鍵が開いてる」
　ミンディが城の扉に手をかけると、扉は普通に開いた。これには、僕も随分不用心だなぁと思った。でも、特に気にせず僕たちは中に入ろうとした。
「待って！！　城の中には入らないで！！」
　コカブの声が聞こえた。僕たちはその声に気を取られ、一歩踏み出そうとしていた足を元の位置に戻し、後ろにいるコカブのことを見た。
「何、あんた来たの。あんなに嫌がってたのに」
　レイニィがコカブを見て、機嫌が悪くなった。レイニィはきっと根に持つタイプだ。
「違うんです。確かに嫌だけど、この城は、城の中に足を踏み入れると箒星が襲ってくるんです。敵の侵入を防ぐために。さっきは、そのことを忘れていました」
　コカブはまた下を向いた。
「なるほど。それだったら、人がいない理由もわかるな」
　ミンディはコカブの話を聞いて納得した。ミンディはのんきそうにしているけど、僕たちは危なかったんだ。まぁ、まだ城の中には入っていなかったけど（庭には入っちゃったけど）コカブがここで来てくれなかったら僕たちは箒星に襲われていた。もし、襲われたら最悪死んでたかも

しれない。そう思うと僕はゾッとした。大袈裟かもしれないけど、あんな箒星に襲われたら無傷では絶対すまない気がするよ。
「城の中にも、そういった仕掛けがあるの？」
　レイニィはさっきので、僕と同じように怖くなったのか、コカブに対する態度が優しくなった。コカブはコクンと頷いた。
「でも、僕は大丈夫なんだ。レックスの友達だし、だから僕と一緒に行けば君たちも罠にはひっかからない。だから追ってきたんだ」
　コカブの目は真っ直ぐに僕たちのことを見ていた。多分、コカブの言っていることは本当のことだと思う。だって、こんな嘘言ってもコカブには何の得もないもの。
「僕、王子と友達だから王子に会わせてあげる。僕についてきて下さい。きっと、謁見の間にいると思います」
　コカブはそう言い、僕たちの前に出て城の中に入って行った。僕たちもすぐ後を入って行ったけど、箒星は襲ってはこなかった。
　城の中は外と同じく凄く綺麗だ。でも、凄く静か。僕たちはコカブのお陰で、すぐに王子様がいる謁見の間って所に行くことができた。あぁ、そうか。王子様とかの方が事情を知っているから王子様の所に連れて行ってくれるのか。てか、ミンディとレイニィは始めからそのつもりだったのかも。
「王子はここにいると思います」
　コカブはそう言い、ドアをノックした。随分立派なドアだなぁ。ノックしても誰の返事も聞こえてこなかったけど、コカブは気にせずに部屋の中に入って行った。僕たちも後に続いた。中に入ると、謁見の間は広くてたくさんの人がいる。今までコカブ以外の人を見なかったけど、皆ここに居たのかな？　にしても、皆結構着飾ってる。
「何か、見られてるんだけど……」
　ミンディが周りの目を気にしながら言った。確かに、ここまで皆から見られていると嫌だ。ほら、よくさ、学校の教室とかでドアを開けると皆がこっち見るときあるじゃない？　それと同じ感じ。でも、何で皆が見てるかっていうと、僕たちが場違いだから見ているんだと思う。取りあえず周りの人たちは僕たちに注目し終えると、僕たちのことなんかなかったように気にせずおしゃべりを始めた。でも、一人だけ身なりのいい男の子がこっちにやってきた。
「コカブ？　どうしたの？　それに、その人たちは……」
　男の子は金髪に金の目をして、頭には冠をかぶっている。もしかして、この子がコカブの言ってた王子様？　コカブと同い年くらいだし、こうしてコカブのとこにきたってことはその可能性が高い。ふと、レイニィの首から下げている雨の雫が気になったから見てみたら、雨の雫の色が薄水色から青色に変わっていた！
「レイニィ！　雨の雫の色が変わっているよ！」
「え！？　本当！？」
　レイニィは急いで雨の雫を見た。やっぱり、青色になっているよね。
「この辺に心の雫があるってことか？」

　ミンディがキョロキョロとあたりを見渡した。僕も見てみたけど、たくさんの人と美味しそうな食事だけしか見当たらなかった。何だか、お腹がすいてきたなぁ。
「君たちは誰なんだい？　この国に一体何の用だ？」
　王子様は少し、警戒している。そりゃ、見ず知らずの人がいたら誰だって警戒するよね。少なくとも僕だったら警戒するけど。でも、ミンディに対しては警戒しなかったなぁ。
「彼はこの国の王子のレックス……レグルス王子だよ。それで、この人たちは……」
「俺はミンディ。女の子がレイニィ、こっちがフィリカ」
　コカブの言葉を引き継ぐようにミンディが言った。レグルス王子は僕たちがコカブの知り合いっていうのがわかると、少し警戒をといた。何だかとっても、周囲が騒がしい。皆楽しそうに笑っているから、パーティか何かなんだろう。
「そのミンディ、レイニィ、フィリカがこの星空の国に一体何の用だ？　コカブがここまで連れてきたってことは、国に害をなすものではなさそうだが」
　レグルス王子は僕たち三人のことをジロジロと見た。僕は少し嫌な気分になった。こんな風に人をジロジロ見ることは失礼だと思う。兄さんもそう言ってたし。
「一つ聞きたいことがあるの。この国も雨は降らなくなってる？」
　レイニィは真剣だった。心の雫は間違いなくこの国にあるってわかったからかもしれないけど、とにかく真剣だった。やっぱり、コカブに青い系の石の話をした人は心の雫を狙っているのかな？　ここに、心の雫があるって知っていたんならその可能性はあり得るよね。心の雫が何色なのかはわからないんだけどね。
「雨か？　そういえば、ここ何カ月かまったく降っていないな。だが、この国では雨が降ると雲が星空を覆ってしまうから、不吉なことと言われているんだ。そもそも、あまり雨の降る地方ではないからそのようなことが言われるようになったと思うんだが」
　レグルス王子は何でそんな質問をするんだという感じで、レイニィに言った。そうか、ここの国、あまり雨は降らないのか。まぁ、星空の国なんだし、そりゃそうか。星空がいつも見えなかったら星空の国とは言えないし。
「あんた、心の雫って知ってる？」
　レイニィは、ついに単刀直入に聞いた。雨の雫は相変わらず青色で、少し光っているようにも見えた。僕は、コカブとレグルス王子をチラリと見たけど、さっきと同じ表情で何を考えているのかわからなかった。
「心の雫？　何だ、それは。どんな色でどんな形をしているのだ？雫というくらいだから青色か？　コカブはわかるか？」
「ううん、聞いたこともないよ」
　コカブはレグルス王子の問いに、首を横に振って答えた。この表情は確かに、わからないとか知らないって時に見せる表情だ。でも、心の雫は知らなくても、言い方を変えればどうだろう？
　例えば、青い石とかね。
「青い石……」
　僕はいつのまにか、そう呟いていた。自然と口にでたって感じだ。でも、その一つの単語でレ

グルス王子とコカブの表情が変わった。コカブの表情はさっきのことを言ってしまうんではないかって不安そうにしている表情だ。レグルス王子の表情は、はっとしたときにする表情みたいな感じ。
「青い石のこと、何か知っているのか？　あの男のことも」
　レグルス王子はそのはっとした表情のあと、少し不機嫌になった。きっと、青い石で何かがあったんだろう。僕はそう思った。ミンディもレイニィもそう思ったに違いない。だから、僕たちは三人揃ってレグルス王子の次の言葉を待った。
「ここ最近ではないが、変な男が青い石のことについて話していたんだ。何て言っていたかはよく覚えてはいないが、もし誰かがその青い石を持っていたら持ってこいと言っていた気がするよ。それは盗みに入るから、私も父もそんなことはするなと言ったのだが、男が何かお礼をすると言ったのだろう。この間、城の者が青い物……つまり、青い星なのだか、それを持って姿をくらましたんだ」
　レグルス王子は少し腹を立てているようにもみえた。コカブが言わないでって言ったのは、レグルス王子が反対し禁止したからなんだ。この二人の関係は友達とかぐらいにしかわからないけど、ただの友達じゃないと思う。もっと、こう身分を超えた親友みたいな関係だと思うんだ。だから、コカブは言わないでって言ったんだ。親友をがっかりさせたくなかったから。だって、レグルス王子はけしからんって顔をしているけど、コカブはその目を見ないように下を向いちゃったもの。
「その男の人はどんな人だったの？」
　レイニィはレグルス王子に問うた。謁見の間に居た人たちがチラホラといなくなりはじめた。
「確か、口髭を生やしている男だ。どこの国の者かは知らないが」
　レグルス王子は思い出しながら言った。コカブは相変わらず下を向いている。
「口髭を生やした男。それだけじゃ、わからないな。そんな人はたくさんいるし」
　ミンディの言う通りだ。口髭を生やしている男の人なんて、たくさんいる。夕暮れの街で遭ったおじさんだって、口髭を生やしていた。そういえば、僕の親戚のおじさんも口髭を生やしていた。ほら、僕の少ないネットワークで二人も見つかった。これじゃあ、情報が少なすぎるよ。
　話していると、いつのまにか、周りの人たちがいなくなっていた。何人かはレグルス王子に挨拶をして部屋から出て行った。今、この謁見の間にいるのは僕たちだけだ。
「む。もう月が沈んだか。男や青い石については、明日話してやろう。コカブも旅人たちも、今日はこの星空の城に泊まっていくといい。部屋は二階の部屋が空いている。空いている部屋ならどこを使っても構わん」
　周りの人たちがいなくなると、レグルス王子はそう言い残し、去っていった。僕たちはポツンと残された。
「ここは、もしかして月が太陽の代わりなのかい？　月なんて初めてみたけど」
　ミンディがコカブに問うた。僕は、近くにあった窓から空を見てみたけど、確かにそこには月はなく、星たちだけが瞬いている。僕の住んでいる森は木で覆われているから、空もここまで見られないから何か不思議。

「うん！　そうだよ、ここでは月が沈むと夜になるんだ。それより、ついて来て。案内するよ」
　コカブは僕たちの先頭に立ち、部屋を出た。コカブがいつのまにか僕たちに敬語じゃなくなってる。僕たちもコカブに続いて部屋を出た。そういえば、雨の雫はどうなったんだろう？　僕はちょっと気になったから見てみた。
「あ！　レイニィ！　雨の雫の色が元に戻ってるよ！」
「え！？」
　レイニィは僕の声で慌てて雨の雫を見た。雨の雫は薄水色に戻っていた。
「ってことは、さっきの部屋にあるのか？　それか、あそこにいた人が持っているかだな」
　ミンディの言う通りだと思う。でも、僕は人が持っていると思う。それに……。
「部屋だったら今確認できるよ。誰もいないもの」
　今は僕たちしかいない。部屋を出たけど、誰か部屋に入ったのを見てないし。レイニィはコクンと頷き、出たばかりの部屋に一人で入った。コカブは僕たちが何かやっていることに気づき、何も言わずに待っててくれた。
「どう？」
「駄目みたい。場所ではなく、人ってことみたい」
　雨の雫の色は変わらなかった。でも、この部屋に入ったらさっきは変わった。今とさっきの違いは人がいるかいないかだ。レイニィは少し残念そうにしていたけど、一つ手がかりをつかむことができた。心の雫はこの国にあって、さっきまでここでパーティをしていた人が持っているんだ。
「コカブ、今日は何の集まりだったの？」
　レイニィは僕たちの所に戻ってくるなり、コカブに問うた。コカブは少し考えていた。
「多分だけど、舞踏会か何かだと思う。服装が皆ドレスだったし踊っている人もいたでしょう？」
　コカブは多分だけどって付け足した。そういえば、女の人はドレスだったね。踊るっていうのはそこまで気にしてみて見てなかったからわからないけど、音楽はなってた気がするよ。といっても、僕は舞踏会っていうのがよくわからないんだけど。
「そうかぁ。それだと、探すの大変だな。明日にでも、レグルス王子に聞いてみるか」
　僕もレイニィもミンディのその案に賛成した。僕たちはコカブの案内で食堂と二階に行き、ご飯を食べて眠ることにした。ご飯は何か星型のお菓子とかがあった。もちろん、兄さんがリュックサックに入れておいてくれたパジャマに着替え、寝る前に兄さんへと僕との健康と幸せを聖霊様に祈るのを忘れない。ミンディとレイニィの部屋がどうなっているかは、わからないけど、僕の部屋はろうそくを消すと、天井に星空が現れ、まるで本物の星空の下で寝ている気分になった。どんな仕掛けかはわからないけど綺麗だった。もちろん、窓からも満天の星空が見えて綺麗。あの箒星も見えた。
　僕は不思議な夢を見た。今までこんな不思議な夢は見たことなかったけど、夢に女の人と時計が出てきたんだ。僕はそれを見ていて、女の人が僕の手を、時計のベルがなりだす直前に時計に触れさせ、不思議な感覚を感じた。なんだか、吸い込まれるような感覚。その直後、僕は目を覚

まし、めまいと吐き気に襲われた。

　朝、起きると太陽の暖かい日差しではなく、月の神秘的な光が入ってきていた。太陽の光で目覚めていた僕にとってはとても奇妙な感覚だ。そういえば、ここの人たちの体内時計はどうなっているんだろう。太陽とかではなく月の光なんだね、きっと。
　僕はパジャマから兄さんがリュックサックに入れておいてくれた服に着替え（今日着ていた服は、どこかで洗濯してまた着よう。服もそんなに持ってきていないし）ミンディの部屋に行った。
「ミンディ、起きてるー？」
　部屋のドアを三回ノックしてから、僕はミンディに声をかけた。ミンディは眠たそうな声で返事をした。
「わぁ、凄い」
　ミンディの部屋を開けると、暖かい光が漏れてきた。太陽の光みたいに暖かい光。ミンディはズボンだけ履いて寝たのか、ズボン以外は何も着ていなかった。と、いうかミンディは筆しか持っていなかったからしょうがないのかな。僕の家に泊まったときは服を貸してあげたけど、僕の服じゃ小さいしな。
「この光はあれが出しているの？」
　暖かい光はミンディの部屋の真ん中の天井付近に浮いているミニチュアな太陽が出しているものだとすぐに気づいた。その太陽のそばにミンディが昨日着ていた服と、下着が干してある。ミンディは眠たそうに「うん」と頷いた。僕は太陽とともに起きる。森にはちゃんと太陽があるから。作り物かもしれないけど、ミンディの太陽を浴びたとたん、僕の体は朝だと感じたらしく、少し眠かったけど、その眠さはどこかに吹っ飛んでいき、まだ夜のような気がするっていう感覚は消えた。何か、凄く爽やかな朝だ！　ミンディは大きなあくびをした。
「やっぱり太陽はいいよなぁ。暖かいし。月の光は冷たいし。そもそも、太陽の国は、あまり月の光が届かないしな」
　ミンディは気持ちよさそうに太陽の光を浴びている。そういえば、前に聖霊様が言ってたきがする。太陽も月も一つしかないって。それで、太陽から一番遠い国には、月が空に昇るって。僕たちが住んでいる森は、中心だから両方の光が届くって。
「よし、目が覚めた。月も見られたし俺はラッキーだな。やっぱり、太陽の方が好きだけど」
　ミンディは大きな伸びをして、ミニチュアの太陽の光を消し、まるで空気を抜くように丸かったミニチュア太陽をぺったんこにして、ズボンのポケットにいれた。その後、干してあったものに着替え始めた。干したってことはどこかで洗ったのかな？
「レイニィも、そろそろ起きてるだろ。行ってみようぜ」
「うん！」
　ミンディの準備が終わると、僕たちはレイニィの部屋に向かった。
　レイニィの部屋に行くのには、少し抵抗があった。だって、レイニィは女の子だし。だけど、その必要はなく、レイニィは自分の部屋の前にいた。

「あ！　おはよう、今からあんたたちの部屋に行こうと思ってたとこだよ。今日は心の雫を探し出すよ」
　レイニィはやる気満々で拳を握った。朝から元気だな。今日こそって、昨日手かがりをつかんだばっかりなのに。僕は少しおかしくなった。
「あ！　よかった。皆起きてたんだ。朝食を食べにいこうよ」
　どこの部屋から出てきたのかはわからないけど、コカブがいつのまにか僕たちの後ろにいた。コカブの隣にはレグルス王子がいる。
「おー、そうするか」
　ミンディが間延びした返事をすると、コカブとレグルス王子は僕たちの前に立ち、食堂まで連れてってくれようとした。と、いっても僕たちは昨日行ったから場所はなんとなく知っているんだけどね。僕とミンディが二人について行こうとすると、後ろからレイニィに服を引っ張られた。僕は少し驚いた。
「何？」
　ミンディは急に服を引っ張られたからか、少し機嫌が悪くなった。だけど、レイニィはそんなのお構いなしで、雨の雫を指差した。
「あれ？　色が……？」
　そう。レイニィが見せてくれた雨の雫は、青色になっていた。昨日、謁見の間にいたときと同じ色だ。僕たち三人は顔を見合わせた。
「昨日、コカブといたときは、色は変わらなかった。青色になったときには、レグルス王子もいた。きっと、心の雫はレグルス王子が持っているんだ」
　レイニィは嬉しそうに笑っていた。ミンディの機嫌も一気によくなった。
「問題はどうやって返してもらうか？」
　ミンディが問うた。この問いは、なぜ問われたのかは、僕でもわかった。だって、昨日レグルス王子は心の雫のことを話しても何の反応も示さなかったんだ。もしかしたら、心の雫は青い色をしていないのかもしれない。僕とミンディがそうやって考え込んでいると、レイニィは前を歩いているレグルス王子の肩をポンっと叩いた。
「ん？　何だ？」
　レグルス王子は振り返り、問うた。僕とミンディも急いで後を追った。
「ここ最近、何か拾ったりしなかった？」
　レイニィは単刀直入だ。レグルス王子とコカブは顔を見合わせ、レグルス王子はポケットに手を突っ込み、ごそごそとポケットをひっくり返した。
「こんなものなら、拾ったが」
　僕たちはレグルス王子が持っているものを見た。何だか、小さなカケラみたいで、よくわからない。
「庭に落ちていたんだ。綺麗だからお守りにしている」
　確かに、レグルス王子の言うとおり、綺麗なカケラだ。僕には綺麗なガラスのカケラにしか見えないけど。透明だし。

「これが、心の雫？」
　ミンディはレイニィの方を向いた。
「わからないけど、雨の雫が青色に光っているってことはそうだと思う」
「これ、君たちのかい？　そうなら、返すよ」
　レグルス王子はすんなりと、ガラスのカケラをレイニィに渡した。レイニィは、そのガラスのカケラを受け取ったけどイマイチぱっとしない感じ。こんなにすぐ手に入るものとは思ってなかったし、まさか心の雫がこんなガラスみたいだとは思っていなかったんだろう。ミンディも、何か複雑そうな顔をしている。
「本当に、これが心の雫なの？」
　レイニィはガラスのカケラをよく見ようと、目の近くに持っていった。ミンディもそのガラスのカケラを見ている。
「ガラスにしか見えないけど……わっ！？」
　レイニィが指でくるくる回しながら、見ているとガラスのカケラは急にパチンと弾け、粉々になった。粉々になったカケラは何となく、雨粒のようにも見えた。僕たちは、全員その雨粒を見た。粉々になった雨粒は、一つの雨粒になり、驚いて口を開いていたレイニィの口の中に入っていった！
「えっ！？」
　レイニィが驚いた声と、何かをゴクンと飲み込む音がした。コカブとレグルス王子は訳がわからないという感じで、顔を見合わせた。
「もしかして、飲んじゃった？」
　ミンディも「何で？」といった感じだ。ミンディの問いに、レイニィはコクンと頷いたけど、レイニィ自身も何が何だかわからないといった感じだ。
「雨の雫の色が元に戻っているよ」
　僕は雨の雫を見ながら言った。
「本当だ。じゃあ、やっぱりさっきのが心の雫？」
　ミンディは雨の雫を見て、レイニィを見た。僕もレイニィを見た。特に変わった所はなさそうだけど。
　僕たちが首を傾げていると、どこからか大きな音が聞こえてきた。
「な、なんだぁ！？」
　ミンディは音に驚き、慌てふためいた声を出した。
「門の方だ。行ってみよう！」
　レグルス王子は、そう言うと一目散に走りだした。その後をコカブが追ったけど、コカブは途中で戻ってきた。
「王様がお戻りになられた。早く城から出た方がいい。近道はこっちだよ！」
　戻ってきたと思ったら、コカブは僕の腕をひっぱり、レグルス王子が行った方向とは別の方向に走り始めた。
「お、おい！　どこに行くんだよ？　朝飯はどうするんだよ？」

　ミンディとレイニィもついてきた。このままだと、僕たちはミンディが心配するとおり、朝ごはん抜きになりそうだ。今まで朝ごはんを抜いたことはなかったのに。僕の記録に傷がつきそうだ。だけど、コカブはミンディの問いには答えず、一階の窓から出て、裏庭を通り、城の敷地内から外にでた。ちいさな門から出たんだ。僕たちが出た門から、僕たちが入ってきた正門が見えたんだけど、そこにはたくさんの人が集まっていたんだ。
「一体、なんだっていうの？」
　レイニィが、ゼイゼイと体を二つに曲げ、苦しそうに肩で息をしていた。ミンディ壁にもたれかかっている。コカブもすごく苦しそう。僕も走ったからかなり苦しいんだけど。あんなにスピードを出し、休みなく走ったのは初めてだった。そんなに、長い距離ってわけではないんだけど、凄く疲れた。多分、朝ごはんを食べていないからだと思う。
「王様、レックスのお父さんが帰ってきたんだ。王様は、レックスが僕みたいな貧乏人と友達になるのを嫌がっているんだ。それに、自分の居ない間に、他国のものを招いたとあれば君たちだって、もしかしたら凄く怒られるかもしれないよ」
　コカブは少し怯えているようにも見えた。そんなに怖い人なのだろうか。ちょっと見てみたい気もするけど、怒られるのは嫌だなぁ。僕はあんまり怒られたことがないから、怒られ慣れしていないんだ。
「私はもう用事はすんだからこのまま次に行ってもいいんだけど」
「でも、次はどこに行くんだ？　手がかりもないし、適当に歩いてどこかに着くっていう可能性も低そうだし」
　レイニィとミンディがそう話していると、ミンディの腹の虫が鳴った。ミンディは少し恥ずかしそうにしていたけど、それにつられて僕の腹の虫も鳴いた。絶対、朝ごはんを食べていないからだ。やっぱり、朝ごはんを食べないってことはよくないんだよ。どこかに、食べる所があればいいんだけど。兄さんが作ってくれたお弁当、残しておけば良かったなって、思ったけど、残しておいたら腐っちゃってたかな？　それは、勿体無いしちょっと嫌だ。
「えーっと、僕の家にでも来る？」
　コカブのその控え目な言葉は、腹をすかしている僕たちにとっては、天の声のように思えた。

　城から見て青白く光っている星の方向に進むと、コカブの住んでいる村があった。城下町に比べると、ずいぶんと作りがぞんざいで、小さな木で出来た家々が立ち並んでいた。村にはゴミ一つ落ちてはいないんだけど、家とかが密集しているせいか、ゴチャゴチャして見えた。僕は、森に住んでいるから余計にそう見えたんだと思う。
「城下町とはずいぶんと雰囲気が違うね」
　レイニィがそう言いながら、腹の虫が鳴った。レイニィだけじゃなく、僕もミンディもコカブの腹の虫も鳴っている。まるで、曲を演奏しているみたいだ。
「星空の国の中じゃ、一番小さな村だよ。あ、あそこが僕の家」
　コカブはそう言って、中でも一番小さな家の中に入った。僕は森に住んでいるから、国のこととかはよく知らないんだけど、同じ国にあるのにこんなに差があるものなの？　差が出るのはし

ょうがないことなの？　ミンディやレイニィはどんなふうに思っているのかな。コカブに不満はないのかな。
　コカブは家の中からドアを押さえ、僕たちを手招きした。僕たちは、コカブの家の中に入った。家の中も外から見た感じと一緒。ぞんざいな作りで、部屋は一部屋しかなく、隙間風がぴゅーぴゅー入ってくる。
「お母さん、友達連れてきた」
　キッチンっていうのかな？　そこにいくと、中年の女の人がエプロンをして、包丁で野菜を切っているのが見えた。何だか、色の薄い野菜だな。日光がないからかな？
「コカブ、貴方また城に行っていたのね？　もう、行ってはだめよ。あそこは、私たちが行っていい場所ではないのだから」
　コカブのお母さんはこちらを見ずに、そう言った。コカブは、コカブのお母さんの隣に行った。
「どうして、行っちゃいけないの？　王様にも言われたけど、友達に会いにいっちゃいけないの？」
　コカブは寂しそうだった。僕にはやっぱり、よくわからないけど、これが身分差っていうものなのかも？　でも、同じ国に生きているのに、どうして違いがでるのか。どうして、大人はそうゆうのを気にするのか。昔に、兄さんがそう話してくれてたけど、僕には結局よくわからない。様々な疑問を抱えていたけど、僕たちはコカブの家の朝食に招待された。これで、うるさかった腹の虫もおさまりそうだ。食事は、ライ麦みたいなパンとさっきの野菜で作られたサラダだった。
「コカブのお母さん、どこかで雨と一緒に光るものが落ちたのを見ませんでしたか？」
　食事が終わり、片付けをしているときだって言うのに、レイニィがコカブのお母さんに問うた。僕とミンディはテーブルを片づける手がとまり、洗い上げてある食器を片づけている二人の方を見た。
「ごめんなさい。見ていないわ。見ているとしたら城の人たちでしょうね」
　コカブのお母さんはそう言って、苦笑した。レイニィも「そうですか……」とつられて苦笑した。
　突然、コカブの家のドアが開く音がして、誰かが走りこんできた。ほとんど、ドアを開けたらすぐ部屋のようなものだったから、皆、慌てる暇もなかった。
「れ、レックス！？」
　走りこんできた子を見て、コカブが凄く驚いた。もちろん、僕たちだって驚いた。レグルス王子は、苦しそうに肩で息をし、呼吸を整えていた。もしかして、城からここまで走ってきたのかな？　僕には出来ない芸当だなぁ。だけど、レグルス王子は転んだのか、頬が少し腫れているように見えた。転んだだけで、あんなに腫れるかな？
「いったい、どうしたの？　王様たちが帰ってきたのに」
　コカブはレグルス王子に座るように促した。けど、レグルス王子は座らず、何故か泣きそうな顔をしていた。何かあったのかな？　それとも、腫れている頬が痛いだけ？

「父様が、父様が……、もうコカブと会うなって。会ったらコカブの村を箒星に襲わせるって……」
　レグルス王子は悲しそうな声で言い、ポロポロと泣き出してしまった。僕たちは、凄く驚いた。そこにいる皆が驚き、戸惑っていた。
「何それ！　酷い！！」
　レイニィが怒った。たしかに、怒りたくもなる。だって、凄く理不尽だもの。
「それで、嫌だって言ったら……殴られて、城を飛び出してきたんだ……」
　レグルス王子の目から、次々と涙が零れていた。
「父様は変わっちゃったんだ。母様が死んでっ……雨が、まったく降らなくなって……」
　レグルス王子の話は、相変わらず僕にはよくわからなくて。だって、この国では雨は不吉なことなのに、雨が降らなくなってどうして人が変っちゃったの？　もしかして、雨が降らなくなったことにお母さんの死が関係しているのかもしれない。でも、僕は子供だからよくわからない。だけど……。
「何があったのかは知らないけど、その態度は許せない！　信じられない！！」
「王様は、きっと自分の子供が心配なんだよ。同時に、コカブには悪いけど、自分たちより身分がかなり下な人たちといて、何かを言われるのを恐れているんじゃないかな？　そして、自分の子供のレベルが下がるのも心配なんだよ。大人っていうのは、レベルとか世間体を気にするものだからな。おばさんもそうでしょ？　だから、さっきコカブに城に行くなっていったんでしょ？」
　ミンディは、怒っているレイニィと違い、冷静だった。ミンディって何か凄いよね。コカブのお母さんは、はっとして、うつむいてしまった。
「……わかってはいるの。レグルス王子がコカブにとってどれだけ大切な存在か。でも、身分が違いすぎるし、周りに何を言われるかわからないから……」
　コカブのお母さんは僕たちとの間に壁を作るかのように、胸の前で腕を組んだ。でも、何でなんだろう？　大人と子供ではどうして、こんなにも考えが違うんだろう？　大人は皆、子供だったのにどうして子供の考えではなくなってしまうのかな？　大人になるってことは、大きくなることだけじゃないのかもしれないね。
「お母さんは何もわかってないよ。レックスは、こんな僕の友達になってくれたんだよ？　運動音痴で、頭も悪くて友達もいない、こんな僕の友達になってくれたんだよ？　だから、青い石を盗ろうとしたんだ。青い石を持ってくれば、お礼を渡すってあの人言ってたし。それに、この村じゃ、皆が青い石を探している。だから……、だから一番に見つければ、認められると思ったんだ」
　コカブのお母さんはコカブの話を黙って聞いていた。
「僕は、ずっと自分に自信がなくて、負け犬だと思ってた。で、でも、レックスが違うって言ってくれたんだ！　だって、レックスは、僕を認めてくれたんだ。コカブは、星の中の星だって言ってくれたんだ！」
　僕には、コカブの話の意味も、レグスル王子の気持ちもよくわからない。だって、僕は身分と

かそういったものを経験したことがない。だから、よくわからないんだ。身分とかがどれほど凄いものなのかとか。
「どうして、レグルス王子のお母さんは死んじゃったんだ？」
　ミンディが突然レグルス王子の方を向いた。レグルス王子もミンディを見た。レグルス王子はすぐにうつむき、悲しそうにみえた。
「ここは、あまり雨が降らないって話をしただろう？　それはここの気候とか、地形の問題だから、あまり雨が降らなくてもたまの雨でやっていけたんだ。でも、雨がまったく降らなくなっちゃって、水不足になったんだ。ここの植物とか野菜は、月の光とその、たまの雨で育つんだけど、雨が降らなくなって枯れちゃったんだ。それで、母様は、その野菜にあたっちゃったんだ。って、父様から聞いた。だから、雨が降れば……。水不足も解消されて……」
「わかった。私、やってみるよ」
　レグルス王子の言葉を遮り、レイニィが言った。皆の視線は、レイニィに向いた。僕もレイニィを見た。レイニィはまっすぐにレグルス王子を見ていた。
「そんなこと、出来るのかい？」
　レグルス王子は不安と期待の目で、レイニィに問うた。
「わからないけど、雨の国の姫様の心の雫がなくなって、雨が降らなくなった。私の中には、その心の雫のカケラが入っている。だから、出来ないことはないと思う。とにかく、私は城に行くよ。王様にもガツンと言ってやりたいし」
　そう言って、レイニィは拳を握った。レイニィって結構、男勝りな性格だよね。
「さぁ！　ミンディにフィリカ、行くよ！　おばさん、ごちそうさまでした。おばさんも雨が降ったらコガブにレグルス王子と遊んじゃダメとか言っちゃだめだよ！」
　レイニィはコカブのお母さんにそう言うと、僕たちの先頭に立ち、コカブの家を出た。僕たちも慌ててレイニィの後を追った。
「待って！　僕たちも行くよ！」
　レグルス王子とコカブが僕たちの後を追ってきた。

　城の近くまで来ると、人がたくさんいた。昨日来た時は一人もいなかったのに。
「きっと、レックスを探しているんだ」
　箒星に乗って、空を飛ぶ人たちを見て、コカブが言った。あの箒星、乗ることが出来たんだ。たくさんの人が箒星に乗って、キョロキョロと見まわしている。そのうちの一人が僕たちの方に気付き、僕たちもその人に気付き、目があった。その人は、そのままこっちに向かってきた。
「皆、逃げろー！！！」
　レグルス王子の声で、僕たちはその場から逃げだした。さっきまで、僕たちがいた所は、もの凄い音がして、まるで隕石が落ちたかのように地面がへこんだ。箒星が、落ちたんだと思う。
「レグルス王子！！」
　そのへこんだ所から、箒星に乗っていた男の人が出てきた。箒星が落ちた衝撃で、土煙がまっていたけど、男の人は、箒星に乗ったままで、僕たちの方に方向を変えた。何で、さっき箒星は落ちたのに、この男の人も箒星も無事なの！？　僕はそんなことを考えながら、走っていた。
「わー！！　あの人、落ちたのにまだ追ってくるー！！」
　ミンディがびっくりしたのか、そう大声をあげた。
「箒星は、一回落ちただけじゃ、死なないんだよ。それに、箒星に乗ってる人が向きをこっちに変えたんだ。箒星はまっすぐにしか進めないから。後、あの人は落ちる前に、箒星から降りたんだよ！」
　レグルス王子は、こんな状況でも説明してくれた。
「レグルス王子！　もう逃がしません！！」
　僕たちは、いつのまにか挟み撃ちされた。ここが、もし森だったら僕は逃げ切る自信があったのに。ここじゃ、空から丸見えだ。箒星に乗っていた人たちは、箒星から降り、箒星をまるで馬がどこかにいかないようにするために、紐で縛りつけ、先に進まないようにさせた。僕たちはジリジリと追い詰められた。後ろからも、前からも、横からも。しかも、相手は武器を持って、僕たちを追い詰めていく。
「レグルス王子はこちらへ」
　僕たちを囲んでる中のリーダーみたいな男の人が言った。この人だけ、帽子の色が他の人たちとは違う。レグルス王子は応じなかった。
「父様に会わせろ。父様は今どこにいるんだ」
「王様は最上階にいらっしゃいます。後で、連れて行ってあげましょう」
　男の人はにっこりと笑った。何だかうさんくさい笑顔だな、と僕は思った。すくなくとも僕はそう思ったんだ。
「ミンディ。あんたの箒、私たちを乗せて飛べる？」
「さぁ、わからない。やったことないから」
「なら、やって。最上階に飛ぶよ」
　レイニィとミンディが周りの人に聞こえないように、コソコソと話している。コカブとレグル

ス王子は耳を澄ませて、その話を聞いているみたいで、ミンディの背から降ろされた筆を全員で掴んだ。
「レグルス王子。あなたはこの国を導くものです。下々のものたちと一緒にいてはいけませんよ。また、王に怒られますよ」
「僕は父様のようにはならない！　父様のように、変わったりはしない！！」
　レグルス王子が男にそう言い放った瞬間、ミンディの筆は飛んだ。ミンディの筆はびゅんと最上階へと飛んだ。本当にあっという間だった。皆筆に跨らず、掴んでいる状態だったってのに誰も落ちなかったのは奇跡だと思う。まぁ、僕が落ちなかったから皆には楽勝だったのかも。
「案外できるもんだな」
　最上階……屋上かな？　そこにつき、僕たちは、ミンディの筆から手を離し、ミンディはいつものように筆を背負った。
「王様はどこにいるの？」
　レイニィがキョロキョロと王様を探した。
「多分、あのドアの向こうにいると思う」
　レグルス王子が、この屋上に唯一あるドアを指差した。きっと、あのドアの向こうが、部屋で、下の階に続いている階段とかある所なんだろう。
「早くしないとあいつらが来るよ」
　レイニィは、先頭に立ち、王様がいると言われたドアをノックもせずに開けた。ドアの向こうは、やっぱり思った通り、部屋みたいになっていて、レグルス王子が言ったように王様が居た。部屋の中には、ドアがあった。ベッドもあった。しかも、誰かがそのベッドに寝ている。王様は僕たちに気付いていたけど、僕たちの方を見ようとはせず、ベッドで寝ている人を見ていた。女の人だ。
「母様……？」
　レグルス王子の呟く声が聞こえた。
「母様、母様なのっ！？」
　レグルス王子はレイニィを押しのけ、ベッドで寝ている女の人に近寄った。だけど、はっとして、途中までしか近づかなかった。レグルス王子の話では、お母さんは死んじゃったんじゃなかったっけ？　なのに、どうしてここで生きているの？　生きているなら、どうして、レグルス王子は知らなかったの？　様々な疑問が僕の頭に浮かんだ。
「レグルス。それ以上は近づいてはだめだ。病がうつるかもしれないからね」
　僕は王様を近くで見るのは初めてだったけど、レグルス王子たちが話していた人とは違う人のように見えた。体が大きいから怖そうには見えるかもしれないけど、優しそうな感じもする。僕は女の人をよく見ようと、目を細めた。何か、よくわからないけど、女の人の体から緑色のものが生えているように見えた。
「何で、死んだなんて言ったの？」
　レグルス王子は、王様の言うとおりそれ以上近寄らなかった。
「……。医師にいつ目覚めるかわからないと言われたからだよ。だから、死んだことにした。こ

こ最近、乾燥が好きなカビが発見されたんだ。王妃は、それにかかったものを食べ、感染してしまったんだ」
　王様は悲しそうに、レグルス王子のお母さんの手を握った。手からも緑色のものは生えていた。この緑色のものは、カビだったんだ。
「だからと言って、レグルス王子とコカブが遊んじゃいけないっていう理由はどこにもないじゃん！！」
　レイニィが二人の会話に割り込んだ。レグルス王子のお母さんの目は、堅く閉じられている。
「君たちは……。コカブも一緒か。君は他国の子だろ？　人の国のことに首を突っ込んでもらいたくない」
　王様はレグスル王子のお母さん、つまり王妃様から目を離さずにレイニィに言った。
「ぼ、僕は！！　レックスと一緒に遊んだりしたいです！　だって、友達だからっ！　お母さんもレックスとは付き合うなって言ってたけど……。僕にはわからないです。どうして、レックスと遊んじゃいけないのか……」
　今まで黙っていたコカブが震える声で言った。凄く緊張して、怯えている。王様はやっと、王妃様から目を離し、僕たち……いや、コカブの方を見た。
「レグルスは世継ぎだ。遊んでばかりはいられないのだよ。それに君は貧困層に住むものだ。レグルスに悪い影響を与える。なにより、カビに感染しているものは貧困層の方が多いのだ。レグルスまで、カビに感染してしまったら私はやっていけない」
「ちゃんと勉強もする！　コカブの村では、何も食べないから！　約束する！！　だから、もう会っちゃだめだなんて、言わないで……。コカブだけ、なんだ。本当の友達は。だから、会うなだなんて、言わないで！！」
　レグスル王子は悲壮な声で叫んだ。
　昔、セージ兄さんが言っていた。子供は周りを気にしなくていいから好きなことができる。大人は、子供のことや周りを気にするから子供に行動を制限させる。子供のことが心配だから。一概に大人が悪いとは言えないんだって。だって、セージ兄さんは言ってたんだ。大人っていうのは、自分を抑え、隠さないといけない悲しい存在なんだって。その意味がちょっとわかった気がした。
「ねぇ、雨が降ればカビは消えるの？　だったら、雨が降ったら二人を友達で居させてあげて。雨が降ればカビの問題は消えるかもしれないんだから」
　レイニィは、王様の返事を聞かず、ドアを開け、屋上へと出て行ってしまった。
「レイニィ！」
　ミンディは急いでレイニィについて行った。もちろん、僕も。でも、僕はどんくさいから、ついて行くのに一歩遅れた。レイニィは、屋上で月と星が輝く空に祈りを捧げていた。
「何をしているのかな？」
　僕はこそっとミンディに聞いた。
「俺にもわからない。もし、雨が降ってもここは太陽がないから、虹は作れないな」
　ミンディは、空を見上げた。僕もつられて見上げた。特に何も変わっていない。それでも、レ

イニィは祈りを捧げている。雨の国のお姫様は、あんなふうに雨を降らせるのかな？
　僕たちは空から目を離し、レイニィを見ていた。そのままレイニィを見続けていると、レイニィの周りがキラキラと光っているように見えた。なんとなく、霧みたいのも出てきて空を見上げると、雲行きが怪しくなってきた。だけど、曇りになっただけで、雨は降りそうもない。
「雨を降らすなんて、出来るかどうかわからないことやるなんて、無理だったんだよ」
　いつのまにか、コカブが僕たちの隣に居て、「やっぱり無理だよ」と言った。コカブは心配と諦めが入った表情でレイニィを見ていた。
「コカブ、それは違うぞ。出来るかどうかわからないから、やるんだ。俺たちはまだ子供で、大人みたいにたくさんのことは出来ない。だけど、大人だって昔は出来なかったんだ。皆、初めてやるときは可能性にかけてるんだよ。レイニィは、今その可能性を武器にして雨を降らそうとしているんだ。出来るかどうかって言うのは今までやったことがないから、わからないんだ。だから、無理なんて決めつけちゃだめだ」
　ミンディはレイニィから目を離さずに言った。ミンディの言うとおりだ。やったことがないんだから、出来る可能性だってあるんだ。さっきの、ミンディの筆のこともそうだ。やるか、やらないかの違い。挑戦するか、挑戦しないかの違いなんだ。チャンスは待ってくれない。これは、雨を降らすチャンス。コカブはバツが悪そうにうつむいた。
　突然、頭にポツンと何か冷たいものが当たった。まさか、もしかして！？
「ミンディ！」
　僕は驚きと嬉しさの声を出した。また、頭にポツンときた。次々にポツンときた。
「うん、雨だ。雨が降ってきた！」
　ミンディも嬉しそうに笑った。雨の中でも、小雨で傘がなくても平気な雨。もしかして、すぐに止んでしまうかもしれないけど、間違いなくレイニィが雨を降らせたんだ。でも、前に、レグルス王子がここでは雨は不吉だって言ってたから、喜んでいいのかわからなかった。って言っても、もう喜んでるんだけどね。
「雨……ずいぶんと久しぶりに見た気がする。雨も必要なものだったのだな」
　王様がいつのまにか屋上に来ていて、雨の降る空を見上げていた。レグルス王子は雨を掴もうとはしゃいでいる。そうか。なぜ、ここでは雨が不吉か、どうしてコカブとレグルス王子が一緒にいられないのか。前に、聖霊様がこう言ってた気がする。人は自分と違うものを恐れるって。確かに、いつもの生活に違うものが入ってきたら怖い。きっと、子供より大人の方が怖がりなんだ。だって、周りを気にするとか、自分と違う立場の者を避けるとかってことは、そうなんじゃないかな。王様は突然、あの部屋に戻った。
「つ、疲れた……」
　レイニィがそう言い、祈るのをやめると、雨は自然と上がってしまった。でも、間違いなく雨は降った。だって、床が濡れてるもの。
「お疲れ」
　ミンディがレイニィの肩をポンと叩いた。レイニィは疲れているけど、やりきったって感じで爽やかな笑顔で笑った。そんなレイニィは凄く綺麗で、まるで見たことはないけど、お姫様みた

いだった。
「そうだ！　母様は！？」
　レグルス王子は急に大声を出し、部屋の中へ入って行った。僕たちも後を追った。部屋では、王様が王妃様の手を握り、僕には泣いているように見えた。
「レグルス、見てみなさい。カビが薄くなっているよ」
　先に部屋にいた王様が、レグルス王子に嬉しそうな声で言った。
「本当に！？」
　レグルス王子は、王妃様のすぐ近くに行った。僕もチラっとみたけど、確かに王様の言うとおりカビが薄くなっていた。きっと、このカビは乾燥が好きだから、さっき雨が降って湿気が出たせいで少しばっかりカビが死んだんだと思う。やっぱり、雨は必要なんだ。聖霊様も兄さんもこの世に必要でないものはないって言ってたもん。
「……私は間違っていたのかもしれないな。周囲の目を気にしすぎていたみたいだ。私が父や母にそうされたように、　レグルスにも同じことをしてしまった。私は、あのときの思いを忘れていたよ。言い訳がましく聞こえるかもしれないが、友達は必要だ。王妃はそう私に訴えかけていたのを思い出したよ。そもそも、貧困層があるならその貧困を私がどうにかしなければならないな」
　王様はそう言って、笑った。でも、僕たちが笑うのと違う。昔に見た、僕のお父さんたちもこんな風に笑っていたような気がした。
「じゃあ、コカブと遊んでもいいの？」
　レグルス王子は凄く嬉しそうだった。コカブも。王様はゆっくりと頷いた。その頷きを見たとたん、レグルス王子とコカブはお互い顔を見合わせて、笑い、とび跳ねた。
「あの！　雨に混じってキラキラしたものが落ちるのを見ませんでしたか？」
　多分、レイニィはこれがずっと聞きたかったんだと思う。だって、言葉に力がこもってるもの。王様はよくわからなさそうな顔をして、レイニィの方を見た。
「私は知らないが、君たちは夕暮れの街から来たのかな？」
「はい。夕暮れの街から来ました」
「なら、そよ風の村に行くといい。風がくる道に進めばつくはずだ。そうだな、ちょうどもうすぐ強い風が吹くから、その風に突き進めばいいだろう。一番わかりやすく、早くに着くはずだ」
「わかりました。ありがとうございます」
　レイニィは、王様にふかぶかと丁寧にお礼をした。そんなレイニィを見て、僕とミンディも慌てて真似をした。
僕たちは、コカブとレグルス王子に風がくる道を教えてもらい、二人と別れた。二人はそのまま遊びに行ったんだと思う。僕は、森から出て、色々なことを学んだ。きっと、森にいたら一生わからなかったことだ。森から出たことは良かったことなのかもね。

第四章　よそ風の村

　風がくる道は、どこよりも風がびゅんびゅんと吹いている。僕たちは、その風に逆らって進んでいる。髪がちょっと邪魔だ。
「ん？」
「どうした、フィリカ？」
　風に逆らって風の中を進んでいると、僕は奇妙な感覚に囚われた。誰かに見られているような、そうでないような？
「何か、誰かに見られているような、見られていないような感じがするんだ」
　自分でも、変なことを言っているのはわかってる。僕は確かめるように周りをキョロキョロと見渡した。人の気配はしないんだよね。だから、何かとっても不思議なんだ。うまく、説明できないや。
「もしかして、アレじゃない？」
　レイニィは、僕が見られている感覚を感じている方を指差した。その指の先には、何でかわからないけど、めざまし時計が浮いていた。そういえば、キョロキョロとしているときに、チラっと視界に入ったような気がする。
「何でこんなとこに時計が浮いているんだ？」
　ミンディは、追い風を受けて、時計の所に行った。
「ミンディ！　変に近寄らない方がいいよ！」
　僕は、時計に触ろうとしているミンディに慌てて言った。兄さんが、得体のしれないものには近寄らない、触らない方がいいって前に言っていたんだ。
「それもそうだ。早く、先に進もう」
　ミンディは、僕の言うことを聞き、触るのをやめ、戻ってきてくれた。僕たちは再びそよ風の村を目指した。星空の国からけっこう歩いたのかな？　空には、星はなく、青い空（ちょっとだけだけどね。まだ、ちょっと暗いんだ。早朝とかそんな感じかな？）が広がってきていた。
「大分、明るくなってきたね」
「風も強くなってきたけどな」
「これじゃあ、中々前に進めないよ」
　僕が空を見上げながら言うと、ミンディとレイニィが風に対して文句を言った。確かにそうだ。星空の国を出てから大分、風が強くなってきている。気を抜けば飛ばされそう。これが、強風っていうのかな？　でも、風が強くなってるってことは、そよ風の村に近づいているってことだよね？　その証拠に、風の向こうに、微かだけど、村みたいのが見える。
「皆！　村が見える！！　もうすぐそよ風の村に着くぞ！」
　村はミンディにも見えていた。ミンディは僕たちの前に立ち、体の小さい僕と女の子のレイニィを強風から守ってくれた。ちょっとカッコよかった。
　どのくらい歩いたんだろう？　よくわからないけど、お腹が減ってきたから、お昼は過ぎてるんだと思う。そんなとき、今まで吹いていた強風は、だんだんと強風ではなくなり、普通の風

になった。その風を抜けると、まるで風の壁を抜けたように無風になった。何だか不思議な感じ。
「あ！　見て！　村がいつのまにか、こんなに近くにあるよ！」
　レイニィは、ミンディの横から首を出し、目の前に広がる村を見て驚いた。もちろん、僕だって驚いた。だって、無風になったとたん、こんなに近くに村が見えたんだもの。無風の所から村の方へ向かっていくと、今度は気持ち良いそよ風が吹いてきた。
「何か、天気もいいし、爽やかな気分」
　ミンディは心地よいそよ風を全身に浴び、気持ち良さそうに目を細めた。風だけじゃない。空もいつのまにか青空になって、太陽がジリジリとかじゃなく、気持ちよく僕たちを照らしている。
「見て！　風車とか、かざぐるまがたくさんあるよ！」
　僕は村を見て、楽しい気分になった。村には、大きな風車に小さな風車、それにかざぐるまが、花のように花壇に植わっていた。そよ風の村では、あれが花なのかな？　僕もミンディと同じように全身に風を浴びた。気持ちなぁって、思ってるとレイニィに服を引っ張られ、ちょっとだけイラっとした。せっかく、風を浴びていたのに。ミンディも同じように思ったみたい。
「どうした？」
　ミンディが、問うた。
「急にひっぱってごめんね。これ、色が変わってるの！」
　レイニィは、僕たちに謝ったあと、押しつけるように雨の雫を見せた。
「本当だ」
　確かに、レイニィの言った通り、青色になっていた。星空の国にいたときと同じ色だ。
「とりあえず、村の中に入ってみようよ」
　僕は雨の雫から目をそらし、二人の方を見た。ミンディも、雨の雫から目を離し、コクンと頷き、僕たちはそよ風の村へと足を踏み入れた。
　そよ風の村は、星空の国とも、森とも全然違っていた。僕は見たことないんだけど、こんな感じの風景が、田舎の風景っていうんじゃないかな？　それに、何かちょっと懐かしい感じ。
「この村は酪農で生活しているみたいだね」
　レイニィは、村全体に広がる牧草地を見て言った。レイニィの言うとおり、村は白い柵で覆われていた。動物たちの姿は見えないけど。あ、でも何かふわふわの綿毛みたいな鳥がいる。あの鳥は野生のなのかな？　それとも、飼われているのかな？　可愛いし触ってみたいな。雨の雫はまだ青色のままだ。
「あ、あれ、かざぐるまじゃなくて、花だったんだ」
　ミンディは花壇に植えてあるかざぐるまの所に行った。僕もレイニィもミンディについて行った。近くでみるとよくわかる。このかざぐるま、ミンディの言った通り、かざくるまじゃなくて、お花だ。お花の匂いがするし、お花の手触りだもの。だけど、かざぐるまだから、風が吹くとくるくる回る。
「ん？　あれ？」

　赤いかざぐるまの、葉っぱに何かついているような気がする。何か、キラキラした、雫のような。星空の国で見たガラスにそっくりだ。
「ねぇ、もしかして、これ心の雫じゃないかな？」
　僕はそのキラキラしたガラスを拾い、レイニィに見せた。星空の国でみたものより、大きかったから見つけられたのかもしれない。
「本当だ。星空の国で見たのとおんなじだし、雨の雫も……わっ！？」
「え！！？」
　レイニィがガラスのカケラを覗き込むように、見るとカケラは僕の手から離れ、またレイニィの口の中に飛び込んだ。ゴクンと飲み込む音がした。どうやら、レイニィは心の雫をまた飲み込んじゃったらしい。雨の雫はもとの薄水色に戻っていた。
「もしかしたら、心の雫は心の雫に惹かれて、口の中に入ったんじゃないのかな？　星空の国のことは偶然かもしれないけど、今回は偶然じゃない気がする。もとは一つだったんだから、ありえなくない話だろ？」
　ミンディは、レイニィを見ながら言った。
「それは一理あるかも。でも、私の中に入って、どうやって姫様に返せばいいんだろう……」
　レイニィは、そう言い腕を組み考え始めた。僕とミンディも考えた。僕たちが考え込んでいると、あのふわふわの綿毛みたいな鳥たちが歌うような声で鳴き始めた。
「急にどうしたんだろう？」
　ミンディの呟く声が聞こえた。鳥たちはまるで、ハミングしているかのようだ。鳥たちが、ハミングしていると、今度は風車がついてる建物の中から二人の女の人が出てきた。何か、袋を持って。
「さぁ、マエストラーレ。鳥たちに餌をやってちょうだい。私は向こうの鳥たちに餌をあげるわ」
「ミストラス姉さん、わかったわ。あら？」
　女の人たちは僕たちに気付いた。この女の人たち、すごくそっくりだ。双子なのかな？
「ミストラル姉さん、見たことのない子たちがいるわ。旅の人かしら？」
　マエストラーレと呼ばれていた方が、僕たちに大きく手を振った。それを見て、僕たち三人は顔を見合わせ、無言の打ち合わせをし、二人の所に行った。
「こんにちは、はじめまして。私はミストラル。こっちは妹のマエストラーレ。皆さんは旅人？」
　僕たちが二人の前に来ると、ミストラルと名乗った人がいった。二人とも、全部一緒で凄くそっくりだ。しゃべっていないと、どっちがどっちだかわからないや。その間もふわふわの鳥たちはハミングしていた。風にのって、ふわふわと飛んでいるものもいた。
「はい。俺はミンディ。こっちがフィリカ。この子がレイニィです」
　ミンディが代表して、僕たちのことを紹介し、ミストラルさんと握手をした。ちょっとだけ、羨ましかった。だって、僕だって男の子だもん。
「やっぱり旅人さんだったのね。うちにあがって、お茶でも飲んでいって。マエストラーレ、旅

人さんたちを案内してあげて。私は、ルーアハ鳥に餌をあげておくから」
「はい。ミストラル姉さん。さ、皆さんこっちにいらっしゃって下さい」
　僕たちはマエストラーレさんの後をついて行った。ちょうど、お腹も減ってきたし良かった。
　僕たちは風車がついている家に案内された。マエストラーレさんはお菓子と紅茶を用意してくれた。
「あの鳥たちは何に使うんですか？」
　レイニィが窓からミストラルさんがふわふわの鳥たちに餌をあげるのを見ながら言った。
「ルーアハ鳥のことね？　あの鳥たちのふわふわの毛を使って洋服とかを作るのよ。他にタオルとかもね」
　マエストラーレさんはそう言って、多分あのふわふわの毛から作られたタオルを持ってきてくれた。
「あ！　そうだわ、たくさんあるし、一枚ずつあげるわ」
　マエストラーレさんはどこかに行き、タオルを三枚持ってきて、一枚ずつくれた。
「普通のタオルより柔らかいはずよ」
　僕たちはそれぞれ貰ったタオルを見て、自分の顔にあててみた。
「ふわふわだ！　凄く気持ちいー！」
　まるで、綿毛とか綿みたいだと僕は思った。横目でチラリと見たけど、ミンディとレイニィも僕と同じことをして、気持ち良さそうにしている。
「マエストラーレさん、ありがとう」
「本当にふわふわだ」
　ミンディとレイニィが言った。マエストラーレさんは、にっこり笑った。
「気持ちいいでしょ？　そよ風の村のルーアハ鳥は最高級の毛並みを誇るのよ。あのふわふわな毛は最高よね」
　いつのまにか、ミストラルさんが居てそう言った。肩に小さなルーアハ鳥を乗せている。
「あ、可愛い。まだ生まれたばかりですか？」
「そうよ、二週間前に生まれたの」
　レイニィが、小さなルーアハ鳥に近寄った。レイニィが手を出すと、ルーアハ鳥は小さな嘴で、レイニィの手をツンツンしてきた。何か、凄く可愛いなぁ。ミンディも微笑ましい顔で見ている。やっぱり、動物は可愛いや。
「君たちはどうして旅をしているの？」
　ミストラルさんが僕たちに問いながら、椅子に座った。マエストラーレさんも興味があるのか、僕たちのことを見ている。
「心の雫を探しているんです。雨を取り戻すために」
　僕とミンディが口を開く前に、レイニィがはっきりとした口調でそう言った。
「さっきこの村でも見つけました。見せることは出来ませんけど」
　と続けた。外の鳥たちはハミングしているのが聞こえ、ミストラルさんが口を開いた。
「北風が行く道を行くと、雪と氷の国につくわ。そこの姫様たちは雨の国の姫様の妹君たちよ。

私たちも、心の雫とか雨の国についてはよくわからないけど、そこの姫様たちなら何か知っていると思うわ。でも、今すぐ行くのはお勧めしないわね。一晩泊って、明日の朝に出発しなさいな」
　ミストラルさんは笑っていた。大人の女性というのもは、こんなにも親切なのだろうか。僕たちは二人の言葉に甘え、泊っていくことにした。二人は僕たちが雪と氷の国に行っても寒くないようにって、ルーアハ鳥の毛で作られたコートをくれた。やっぱり、雪と氷だけあって、寒い所なんだ。後、お弁当も作ってくれた。洗濯もしてくれた。ご飯に寝床も提供してくれて、僕は少し悪いような気がしてきた。何かお礼とかした方がいいのかなぁ。何も持ってないけど。
　夜、ミンディとレイニィは寝静まったのに、僕は何故かトイレに行きたくなった。きっと、寝る前にトイレに行かなかったからだ。ミストラルさんたちはまだ起きていて、リビングから明かりがもれていた。
「心の雫、あの話は本当だったのね」
　トイレから帰るとき、ミストラルさんがそう言うのが聞こえた。別に二人がいるとこのドアが開いているってわけでもないし、僕も開けてない。なのに聞こえるってことは、ドアとか壁が薄いのかもしれない。それか、声が大きいか。僕はよく聞こえるようにドアにピッと耳をくっつけた。
「本当に彼の言った通りだった。あの子たちがくるまで信じられなかったわ」
　今度はマエストレーレさん。二人は何か知っているのかな？　さっきは、わからないって言ったのに。
「心の雫や雨の姫は、これからどうなってしまうのかしら……」
　この後、二人は話すのをやめてしまった。僕も強烈な眠気が来たから部屋に帰った。でも、このまま心の雫を探していていいのか不安になった。だって、何で知ってるのに、この二人はわからないって言ったの？　それに、誰から聞いたの？　もしかして、心の雫が砕けたのは偶然じゃないのかもしれない。

第五章　雪と氷の国　前編

　次の日、僕たちは朝ごはんを御馳走になってから、北風の道を歩いた。ここに来る時は逆風で大変だったけど、今度は追い風だから、早めにつくかもしれない。でも、北風だけあってやっぱり寒い。だから、僕たちは初めから貰ったコートを着て行くことにした。それにしても、昨晩のことは二人に話した方がいいのかな？　僕はそれについてずっと悩んでいた。悩むぐらいなら言えばいいんだけどね。

　暫く歩いていると天気の良かった空が段々と曇ってきた。寒さも増したと思う。ここで、僕たちはあまりにもお腹がすいて、ミストラルさんたちが用意してくれたお弁当を半分食べた。
「曇ってきたね」
　ミンディが空を見上げながら言った。もしかしたら、こんな感じの空を今にも泣き出しそうな空っていうのかな？　雨雲みたいに黒くないんだけど、泣き出しそうな雲なんだ。全体的に白っぽい空だけど。でも、僕はたまに白は悲しい色だなって思うときがあるよ。
「ちょっと寒くなってたね。コート着てきてよかったね」
　レイニィは、ぶるっと震えた。確かに、コートを着ているのに、少し寒いような気がするけど、気のせいかな？　いや、気のせいじゃないんだ。だって、耳とか手とかが寒いんだもん。僕、耳が寒い思いをすると真っ赤になるから嫌なんだよな。ミンディなんか、コートのボタンを一番上までしめて、首を隠しちゃってる。普段、太陽の近くにいるからきっと、僕たちよりも寒がりなんだろうなぁ。
「もしかして、そのうち雪とか降ってくるんじゃないのか？」
　ミンディが嫌そうな顔をして言った。
「降ってくるでしょうね。なんたって、雪と氷の国にこれから行くんだから」
　レイニィの言うとおりだ。絶対、雪も降ってくると思う。レイニィは、手をポケットにつっこんだ。何か、北風も、さっきよりピューピュー吹いてい気がする。そういえば、本当に寒くなると眠くなるって本当なのかな？　森にも四季はあるけど、どちらかっていうと、冬は短いからよくわからない。ここでは、はーってやると白い息が出るのが面白くて、僕はずっとはーってやってた。だって、森は、こんなにも寒くなることはないもの。
歩いていると、いつのまにか夕方になってしまった。僕たちは、どこか休める場所がないか探したら、運よく洞窟を見つけた。奥の方に入ると、風もなく、そんなに寒くなかった。僕たちは、お弁当の半分の半分を食べ、くっついて眠ることにした。

　僕たちが、目が覚めたときには朝になっていた。僕たちは、残りの半分の半分のお弁当を食べ、出発した。これだけじゃ、ちょっと足りなかった。寒さのせいか、ただただ無言で歩いた。はーってやるのもやめた。だって、息をするたびに白い息が出るんだもの。ミンディは、コートを着ているにも関わらず、ちょっと震えているようにもみえた。やっぱり、手袋とかマフラーがないときついよね。僕としては、耳あてもほしい。耳が真っ赤になっちゃうから。

「あ、雪が降ってきた」
　暫くして、レイニィがそう言った。細かい細かい粉雪だ。そうか、雪が降るぐらいだもんね。寒いにきまってる。
「うー、寒い。太陽が恋しい」
　ミンディは、貰ったタオルを頭にかぶった。その手があったか！　僕もミンディの真似をして、タオルを頭にかぶった。ちょっとだけ、暖かくなった。レイニィは、マフラーみたいに首に巻いた。皆の頭の上にちょっと雪が積もってて、僕はおかしくなった。そういえば、ミンディはミニチュアの太陽を持ってたけど、使わないのかな？　それとも、あれも一回こっきり？
　そよ風の村はあんなに天気が良かったのに、とっても不思議。世界全部が白くなってしまったから、時間もよくわからない。どのくらい歩いたかもわからない。ただ、積もった雪の上に僕たちの足跡が残っているだけ。でも、その足跡も雪ですぐに見えなくなってしまった。とにかく、足がヤバくなってきたんだ。ブーツとかをはいているわけじゃないから、冷たくて冷たくて。しもやけになりそう。それに、足がちょっと痛くなってきたんだ。結構歩いたって証拠だね。とにかく、僕たちは歩いたんだ。だんだん寒くなし、吹雪いてきた。
「あいたっ！！」
　歩いていると、何かにぶつかった。
「いてっ！」
「あたっ！！」
　ミンディもレイニィも気づかずに、ぶつかった。僕はぶつかったものを触った。平べったくて、横にも広く、高さもある。これは、壁？　白い壁だ。
「ここに壁があるよ！」
　確かにそこには壁があった。すべてが白くてよくわからないけど、確かに壁はあるんだ。ひんやりと冷たい壁が。
「もしかして、この壁の向こうが雪と氷の国？」
　レイニィも壁を触っていた。僕は壁が冷たかったからすぐ触るのを止めた。僕もミンディも、レイニィと同じことを考えていた。だから、僕たちは壁を触りながら歩き、入る場所を探した。やっぱり、ずっと触っていると冷たい。そのまま歩いていると、急に壁が途切れる場所があり、僕たちはそこが国に入る入口なんだと確信し、中に入った。
「あれ……？」
　雪と氷の国に入ると、不思議なことが起きた。相変わらず雪は降っているんだけど、さっきまでの雪とは違って吹雪いていないんだ。しんしんと雪が降っているだけ。
　雪と氷の国は、星空の国とは違ったキレイさがあった。全部真っ白で、道の脇には、ヒイラギの木が植えてあった。川とか水がある所は全部氷で、家々も雪みたいなもので出来ていた。遠くに見える城は、雪の色をしていなかったから氷で出来ているのかな？　何かクリスタルっぽい感じもするし。
「二人とも、城に行ってみようよ」
　レイニィが、氷で出来ている城を指さして言った。僕たちは頷き、今度は城を目指して歩き始

めた。
　初め、この国に来た印象は寂しい感じだった。全部白で、凄く静かだったし。静寂って感じだったんだ。だけど、街中に入ると、雰囲気はガラリと変わった。キラキラしていて、凄く賑やかなんだ。イルミネーションとかしてあって、夜になるとすごく綺麗になりそう。夜にもう一度来てみたいな。僕、雪とか氷とかって寂しいイメージがあったけど、違うんだね。
「凄く賑やかだね。寒いのに、暖かいや」
　レイニィが、嬉しそうに笑い、「クリスマスみたい。これで、サンタクロースでもいれば、本当にクリスマスね」と続けた。
本当にそうなんだ。さっきまでは、白って感じだったけど、赤とか緑って感じ。家とかお店とかも、カラフルで可愛い感じで。木には、電球が巻かれていて、街の真ん中には、大きなもみの木がある。
「何か、楽しいねー」
　ミンディは、元気を取り戻し、ウインドショッピングをしていた。と、いってもミンディが見てるのは服とかじゃなくて、食べ物だけど。食べ物を見ていたら、お腹がぐーってなった。だから、僕たちは、パン屋に入って、パンを買った。僕たちが持っていたお金でも買えたから、ちょっと驚いた。街の人たちも、毛皮みたいな暖かい服を着ている。
　僕たちは一通り街中を見て回ると、氷の城へと向かった。
「わぁ、スゴイ」
　僕はお城の綺麗さに感動した。城門から、お城の庭をのぞいてみると、雪だるまがあったり、氷の彫刻が置いてあったりした。お城はやっぱり、クリスタルみたいな氷で出来ていて、所どころに雪が積もっていた。相変わらず、はーってやると白い息がでた。
「ここも、星空の国と同じで門番とかいないんだね。って、普通に門があくんだけど」
　僕たちは、城門を抜け、城の扉の所にきた。そんなとき、ミンディがそう言って、勝手に扉を開けた。勝手に入っていいってことなのかな？　でも、勝手に入ったら不法侵入にならないかな？　って、ミンディとレイニィはもう入っちゃってるよ！
「フィリカ、早くしないと置いていくよ」
「ま、待ってよ、レイニィ！」
　危うく置いていかれる所だった。だから、ちょっと焦った。だって、レイニィは本気っぽく言うんだもん。僕が、城の中に入ると僕の後で扉はバタンと閉まった。
城の中に入ると、ひんやりとした寒さはあったものの、外よりは寒くなかった。明かりはないんだけど、雪とか氷がキラキラしていたから明かりがなくても、明るかった。まだ、昼ってこともあったけどね。昨日の夜は、まだ雪が降ってなかったからわからなかったけど、聖霊様が、雪国は雪が白いから夜でも何か明るく見てるって言ってたっけ。それに、この城にあるものすべてが氷だって気付いたときにはびっくりした。座ったとき、お尻とか冷たくならないのかな？　うーん、すぐトイレにいきたくなるような国だ。長いは出来ないな。僕たちはひんやりとした長い廊下を歩き、姫たちが居るであろう謁見の間に向かった。なんとなく、謁見の間はどこにあるかわかった。だって、この廊下の先に大きな扉が見えたんだもの。開いてたけどね。

「お前たち、何をしている？」
　僕たちが謁見の間をのぞいていると、突然背後から声がした。あまりに急だし、突然だから僕は飛びあがって驚いた。
「僕に、それともリッカに用か？」
　振り返ると、僕と同じくらいの年頃の男の子がいた。街の人たちが着ていた服より、何かちょっといい感じの服を着ているが、街の人たちと違ってコートとかは着ていない。それに、ここにいるってことは城の人なのかな？
「僕は雪と氷の国の王子、ヒムロだ。君たちは誰だ？　見た感じ、女の子は雨の国の子だと思うが」
　ヒムロと名乗った王子は、僕たちのことを観察しながら言い、何かを思い出したように、はっとした。
「雨の国の子がいるということは、心の雫を探しているのか。姉様の心の雫を」
　そういえば、ミストラルさんたちが雪と氷の国の姫たちは雨の国の姫の妹たちだと教えてくれた。だから、心の雫のことを知っているのか。それに、妹たちってことはもう一人いるのかな？
「あの！　私は、雨の国のレイニィと申します。ヒムロ王子はなぜ、姫様の心の雫が砕け散ったことを知っているのですか？」
　レイニィは、ヒムロ王子に一歩近づき、力強く聞いた。僕は、ヒムロ王子の目が横に泳ぐのを見逃さなかった。
「知っているといえば、知っているが……。その話は、リッカの方が詳しいだろう。会わせてやる、こっちだ」
　ヒムロ王子は、そう言って僕たちを謁見の間に招き入れてくれた。謁見の間には、王座っていうのかな？　豪華なイス（これも一つが氷で、一つが雪で出来ているみたい）の雪の方に、女の子が座っていた。キラキラとしたドレスを着ていて、青白い髪に、雪の結晶の髪飾りをしている。この子が、リッカ？　そうか。雪と氷の国は一人の姫と、一人の王子がいるんだ。
「リッカ。雨の国の子が来た。姉様の心の雫が砕けた原因を知りたいそうだ」
　ヒムロ王子は、王座に座っている肌の白い女の子にそう言った。リッカ姫は僕たちのことを見た。
「ピオッジャ姉様の話？　私も全部知っているわけではないけど、それでもいい？」
　リッカ姫は、そうニッコリと笑いかけた。リッカ姫もコートをきていなかった。レイニィは、コクンと頷いた。雨の姫様、ピオッジャっていう名前なんだ。初めて知ったなぁ。
「教えてください。姫様の心の雫はどうして砕けてしまったのですか？」
「それは、姉様は恋をしてしまったの」
「「恋！！？」」
　レイニィとリッカ姫様が話していたのに、思わず僕とミンディが反応してしまった。ちょっと、煩いって感じで、レイニィに睨まれたけど、びっくりしちゃったんだ。だって、恋とか全然想像していなかったから。

「そう、恋。しかも、姉様は失恋したのよ」
「え！？　姫様が、失恋！？」
　リッカ姫がため息をつきながらそう言うと、今度はレイニィが驚いた。レイニィだって煩いじゃないか、って僕は思ったけど、言わなかった。雨の姫様は、結構美人なのかな？　リッカ姫はさらに続けた。
「そう、失恋。姉様は恋をしたの。どこかの国の王子にね。でも、それは叶わぬ恋だった。それで、姉様の心の雫は砕け散ってしまったのよ。ここからは、私の推測だけど、姉様は片想いってわけじゃないと思う。それに、姉様が恋した男性は、姉様のことを諦めていないと思うわ。雨の国の子が心の雫を探しているのは知っていたけど、貴方たち以外にもいるみたいなの。心の雫を探している人が」
　リッカ姫の話を聞き、僕はレグルス王子が話していたことを思い出した。あの青い石の話。確信はないけど、コカブに青い石の話をしたのは、心の雫とは無関係ではない気がした。
「レイニィ、心の雫が砕け散って姫様は眠っているんだよね？」
　僕はレイニィに問うた。レイニィはコクンと頷いた。
「でも、失恋で砕け散ったなんて知らなかったな。私が姫様に会ったのは、砕け散ったあとだし」
「もしかして、コカブとレグルス王子が言ってた口髭の男ってその男……姫様の失恋相手の命令で動いているんじゃないのか？」
「確かに。そうかもしれない」
　ミンディとレイニィが話しているとき、今度はミストラスさんとマエストラーレさんが話していたことを考えていた。マエストラーレさんは彼の言っていた通りと言っていた。あの二人は、姫様が恋した王子か、口髭の人に会ったことがあるんだ。それで、もしかしたら僕たちみたいに心の雫を探している人が来たらここに行けって言ってあったのかもしれない。でも、そうとは限らないよね？　もしかしたら、邪魔をしている人がいるのかもしれない。だって、叶わぬ恋ってことは邪魔してた人がいるってことじゃないの？
「どうして、お姫様と王子様の恋は叶わぬ恋だったの？」
　僕は皆に聞いた。僕も国に住んでいればわかったんだろうけど、僕は森の人だから。皆は、僕の問いにびっくりしたようだった。
「どうしてって、そんなの常識だろ！？　姫と王子っていうのは、それぞれの国を司どってるんだよ。だから、結ばれちゃいけないんだ。結ばれたら国も一緒になっちゃうから大抵の場合は叶わぬ恋なのさ」
　ミンディが、そんなことも知らないのかという感じで言った。僕は、今初めて知ったよ。でも、それって、コカブとレグルス王子と同じ感じだよね。そんな差別的なことがあるから雨の姫の心の雫は砕けちゃったんだ。
「そういえば、心の雫は？」
　ヒムロ王子が、レイニィに問うた。きっと、見たいとかそんな感じなんだと思う。レイニィは困った顔をした。

「えっと、私の中にあります。ちょっと、誤って飲み込んじゃったんです」
「え？　飲み込んじゃったの？」
「本当に？」
　ヒムロ王子とリッカ姫は、レイニィの回答に驚き、目が丸くなった。レイニィがコクンと頷くのを見ると、二人は僕たちに聞こえないようにコソコソと話し始めた。暫くして、二人は話すのを止め、僕たちの方を向いた。
「この国にも、心の雫は三つあるの。私とヒムロで探しておいたの。今、案内するわ」
　リッカ姫は王座からぴょんと降り、僕たちの前に出て、ヒムロ王子と一緒に謁見の間を出た。僕たちはそれについて行った。
　二人について行くと、レイニィの雨の雫の色が段々と青色になっていくのに気付いた。前を歩く二人には知らせなかったけど。二人は何かを話しながら、僕たちの少し前を歩いていたから。何を話しているのかはわからなかった。僕たちは二人について、まっすぐに伸びる氷の廊下を歩き、付きあたった所の階段を下りた。ここは一階だから、どうやら心の雫は地下にあるみたいだね。地下ってことは、ずいぶんと厳重に管理しているのかな？　なんてったって地下だしね。
　地下にきたらちょっと寒くなった。地下の床は、氷の床の上に雪が積もっていて、まるで雪のじゅうたんみたいにみえた。歩くと、きゅっと音がして、少し楽しかった。雪は、森にもたまに降るから見たことあるけど、この音は好きだな。二人はまっすぐ進んだ所にあった扉の前で止まった。
「心の雫はここにあるわ」
　リッカ姫はそう言って、氷で出来た扉を開けた。部屋はそんなに大きい部屋ではなく、氷のテーブルの上に箱があった。ヒムロ王子が箱のふたを開けてくれて、中をのぞいてみると大きなガラスのカケラが二つ、小さなガラスのカケラが一つあった。
「レイニィの雨の雫が反応しているってことは、本物みたいだね」
　ミンディが、レイニィの雨の雫を見ながら言った。レイニィは、僕とミンディを見た。リッカ姫とヒムロ王子を見た。僕たちもレイニィを見た。多分、皆同じことを思っているのかもしれない。レイニィは僕たちのことをもう一度見て、心の雫に近づいた。僕には、相変わらず心の雫のことはよくわからないけど、レイニィが心の雫に近づくと、心の雫もレイニィの方に動いているようにみえた。
「あ！！！」
　レイニィの声と同時に、心の雫がレイニィめがけて飛んだ。その後、ゴクンという音がした。レイニィは僕たちに背を向けていて、何が起きたのかちゃんとはわからないけど、そのゴクンでレイニィが心の雫をまた飲み込んでしまったことだけはわかった。心の雫はまたレイニィの中に入ってしまったらしい。それは、振り向いたレイニィの表情から誰もが思ったことだ。
「本当に体の中に入っちゃったのか？」
　ヒムロ王子が、信じられないという感じで問うた。リッカ姫もヒムロ王子と同じような表情をしていた。
「勝手に口の中に飛び込んできたんです。ミンディとフィリカならわかるよね？」

　レイニィの問いに、僕とミンディはコクンと頷いた。
「体は何ともないの？」
　今度はリッカ姫がレイニィに問うた。
「はい。特になにもなく、いつも通りです」
「あ！　でも、レイニィは雨を降らせられるようになったんですよ」
「まぁ、降らせられるっていうのかな。あれは。でも、前は出来なかったかな」
「え、雨を降らせられるの？」
　レイニィとミンディの会話にヒムロ王子が割り込んだ。驚いている声だ。レイニィは、ヒムロ王子を見た。
「はい。星空の国で一度だけ。長い時間じゃないですけど、雨を降らせました」
　僕はレイニィの言葉で星空の国での出来事と、兄さんの言葉を思い出していた。昔、兄さんはその国の姫や王子・王や女王ない限り、天候を変えることは出来ないと言っていた。そのときは、イマイチぴんとこなかったけど、今ならわかる。レイニィが雨を降らせたのはおかしいことなんだ。だって、心の雫はレイニィの中にあるけど、レイニィは姫じゃないもん。レイニィの言葉を聞き、ヒムロ王子もリッカ姫も黙りこんでしまった。何を考えていたかわからないけど、僕たちは地下を後にした。どうでもいいけど、兄さんって結構物知りだったんだな。
　その後、僕たちはヒムロ王子とリッカ姫の勧めで、今晩はこの国に滞在することになった。暗くなってきていたし、お腹もすいていたから僕はすごく嬉しかった。暖かい料理が出てくれるといいなぁ。冷たいものは嫌だと思って、ご飯を食べに行ったら暖かいスープが出てきた。いくら、雪や氷の国といっても、国民の中までは氷じゃなかったんだ。こんなに寒いんだもの。国民だって暖かいものを食べたくなるよね。　しかも、夜になったら寒さが増した。
「あ！　見て！！　あれって、オーロラじゃないかな？」
　廊下を歩いていると、ミンディが窓に張り付いた。オーロラって、本でしかみたことないけど、光のカーテンみたいなやつだよね？　僕とレイニィも窓に張り付いた。
「うわぁ、凄く綺麗。光のカーテンだ」
　オーロラは、本で見た通りだった。ううん、それ以上だ。それ以上に綺麗で、僕は涙が出そうになった。ミンディもレイニィも魅入っていた。